HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	臨床心理学における“人”の問題
Author(s)	奥田, 三郎
Citation	北海道大學教育學部紀要, 13, 3-41
Issue Date	1967-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29028
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P3-41.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

臨床心理学における“人”の問題

奥　田　三　郎

Reflexion zu einer Pychopathologischen Methodenlehre

—Bedeutung des Man in der Klinischen Psychologie—

Saburo, Okuda

ま　え　が　き

この論稿は，昭和41年春，定年退職に際しての最終講義に基ずく。退職という一転機に際してのものなので，自分の歩んだ道に即して，一応の綜合的見解を述べ，今後の私の教室の在り方などにも触れた，きわめて主観的な内容であった。その録音記録をわざわざ筆記しなおしてくれたので，これを中心として加筆訂正したものであるから，学術論文として世に問う価値があるとは，私自身考えてはいない。ただ，教育学部教授会が，紀要に入れて，記念にしてやるとの好意ある決定をされたので，これに応えて補足したものである。

私の臨床経験と多少の思索とを裏付けとしたもので，極めて平凡な常識の羅列である。紀要原稿としては，甚だ変則であることを承知の上，私の教室の卒業生や大学生諸君を主対象として，述べさせていただく。使用した概念には，私なりの意味限定をするようにした積りであったが，活字に組むに際して，吟味を加えてみると，曖昧多義的な点が無数に出てくる。しかし，これをはっきりさせようとするには，紙数の限定もさることながら，時日の余裕もなく，私の力も及ばない。それに，典拠や引用した文献を一一示してもいない。その意味でも，未定稿としてみていただければ幸いである。

私が述べようと思うことは，臨床心理学が対象とするのは，何よりも生きている個々の人としての事象であるが，それに応える臨床心理学の現在的状況はどうなっているか。臨床心理学の基礎学としての役割を果たすべき位置を占める科学的心理学は，行動の科学を旗印として，めざましい発展を示してはいるが，これは臨床上の診断及び治療における技術として，どこまで応用し得るようになっているか。この科学としての心理学と，技術としての臨床心理学との間の断層は，どうすれば橋渡しが可能であろうか。相談なり治療を求めにくる依頼者(client)は，それぞれが個体であり，その指導に当る臨床心理学者も，個体であり，この間の関係がラポート rapport とよばれ，臨床上重要な概念になっているが，その個体の意味を吟味してみることから，橋渡しの一つの鍵がみつかるのではないか。この個体を，こころ（心）を有する独立存在として考え，これを中心として，秩序づけを行ってみたら，臨床心理学に，どのような効果，便利を寄与し得るであろうか，というような事柄である。そうして，教育科学においての臨床心理学の位置と役割も，この点から多少とも，明確化されるのではないか，ということも附加的に考えてみようというのである。

臨床心理学の今日的状況
（臨床心理学と科学的心理学）

臨床心理学と称せられる領域が，日本でもここ10年来，急速に発展してきた。数年来の各地方の要望が結集されて，日本臨床心理学会も設立され，昭和40年秋，京都で第1回の大会が，驚くほど盛大に催されたし，機関誌“臨床心理”の外に，“クリニカル・サイコロジスト”という会員間の連絡情報を活潑に発行してもいる。“臨床心理学”と銘をうった概論書も，すでに5種以上発刊されているし，臨床心理とは名づけてなくとも，この領域を取扱っている著書は怖らく200種を越えているであろう。米国に，20年も遅れているといわれながらも，児童相談所，教育相談所，家庭相談室，少年鑑別所，家庭裁判所，児童福祉施設，養護学校，精神病院，精神衛生センター，産業，労務，人事や学生に対するカウンセラーなど，職場も次第に拡大されつつある。まことに，盛大であり，慶賀すべきことである。

しかし，翻って，この社会的需要の増大に対応して，臨床心理学者は，どのような科学的技術を駆使して，責務を果しているだろうか。これには，まず臨床心理学と心理学との関係を概観してみなくてはならない。

臨床心理学は，心理学の応用領域と考えられ，その臨床活動は，主として精神衛生の関係分野で行われる。その主要対象になるのは，生活をいとなむ上において，何

かしら不都合な問題をもつ生きている具体的な個人である。この不都合な問題とは，普通一般的に，適応障害，適応困難とか，適応異常という名で概括される種類の現象で，情緒障害，性格異常，精神薄弱，非行，神経症などとして，具体的な，ある個人の行動異常事態として現われ，これを最も合理的に処理して，問題を解消または軽減し，できるだけその個人の生活上の支障を軽くし，いわば，その個人に可能な極限まで，生を遂げしむる（ausleben）条件をととのえることが，臨床的に要求されるのである。これを果たすためには，正しい診断と治療との技術が必要となる。しかし，正しい診断と技術の基礎づけは，臨床心理学も心理学である限り，科学的心理学の知見と理論とに求められるのが当然のこととなる。

科学的心理学は，いうまでもなく，客観的方法による検証を主軸として発達したものである。‘意識不要の心理学’をスローガンとし，刺戟（Stimulus）と反応（Reaction）との間の関係を定立化する方式，いわゆるS-R方式を以て人間行動解明の鍵とみなし，‘行動主義’を錦の御旗として，いわゆる内省心理学の追放を行なったワトソン以来，S-R方式は，科学的心理学の主軸となった。もちろん‘S’にしろ‘R’にしろ，その後，数多くのすぐれた頭脳により，洗錬され，複雑に工夫され，単純なる2つの独立変数間の関係方式としてばかりでなく，従属変数，仲介変数，その他種々の構成概念 constructs を導入して，実験方法，使用概念の精錬化とその成果の整合的組織化を生み，今日の心理学をして，まだ幼若とはいえ，頼もしい未来を約束せしむる成績をあげるにいたっている。もちろん，これには，フェヒナーやヴントに代表されるS-R方式による精神物理学的方法，ビネーに代表される知能測定法，ゴルトン，ピアソン，フイッシャーなどによる統計学的方法をはじめ，綿密なる観察記録法による多くの成果，関係領域の発達進歩など，すべてが関連しているに違いないが，ワトソンにより提唱された意識（内省的方法）拒否の方向と，使用する方法や概念を，すべて操作可能な，したがって客観的に検証可能なものに限定しようとする方向，すなわちS-R方式が，大道として貫かれ，この基本路線によって，‘行動の科学’としての科学的心理学が，自からの領域の開拓に邁進しているといえるであろう。そうして，このS-R方式を主軸とする実験実証主義は，数学的手法の応用とともに，動物実験成績を基礎に，主対象たる個人の行動機構の解析はもとより，社会的人間行動の解明にまで進んできているのである。すなわち，人間行動の予測，したがって人間行動を規定し変容する諸条件の科学的体系を，客観的検証方法に基いて組織化する道を進んでいるのである。この努力は，ようやく実りはじめ，知覚，学習と記憶，動機づけ（要求，動因，目標），情動，知能，発達（人格形成），社会的行動などについての行動学的研究成果は，ゲシュタルト理論，精神分析理論，動物生態学，文化人類学などからの理論と共に，人間行動についての解析を，かなり可能ならしめるにいたった。（私のように，大正末期に心理学を学び，いわゆる精神的作業研究を主にした実験に，馴染み難い感をいだいた者にとっては，この40年間にみられる心理学の進歩は，まさに目をみはらせるものがある。もちろん，当時の実験にも，‘精神動作学’の樹立という今日の流れに沿う意図がこもっていたのであるが，当時の私には，ワトソンの行動主義の叫び声はきこえてはいても，やはり意識，ことに今日のいわゆるパーソナリティの深みにある意識構造が中心問題で，S-R方式との関連が全く理解できず，偶然に知ったクレチマーの‘体型と性格’を通じて，精神医学に走ったのである。）

行動機制の諸条件の解明にもとづく人間行動の予測，行動を変容させる諸条件の体系，これが，S-R方式を中軸とする科学的心理学の所期するところであるとすれば，この進歩は，そのまま，臨床心理学的技術に応用されて，いいはずである。臨床心理学に課せられる問題は，適応異常と通称される人の行動形態を変容し，正常化せしむる条件の設定を案出工夫するにあるからである。しかし，実状はどうであろうか。結論を先きに述べると，二，三の点を除けば，科学としての心理学とこの応用技術学としての臨床心理学との間には，今なお，かなりの断層があり，これを飛越えて，両者を連絡するには，特別な配慮を必要とすると思われるのである。

そこで，ふたたび臨床心理学に戻って，現況を実際場面との関連において，概観してみよう。臨床心理学の対象が，広義の適応異常で，この具体像が，(i) 弱視者，盲者，難聴者，聾者，言語障害者，精神薄弱，肢体不自由者，病弱者，身体虚弱者など，義務教育年齢期を中心として，いわゆる特殊教育の対象になるもの，(ii) 虞犯，非行，犯罪者など，教護教育ないし矯正保護の対象になるもの，(iii) 登校拒否ないし学校恐怖症，自閉症，神経症，攻撃的行動，孤独癖，緘然，家出など種々のかたちで情緒異常として問題となる行動を示す個人，(iv) 夜尿，頻尿，異食，爪噛み，指しゃぶり，チックなど，(iii) と原因的には共通していても，本人の悪癖（行動習慣）の如くみなされるものの所有者など，多種多様なかたちで，臨床場面に登場してくることは，衆知の通りである。この各種のかたちで，相談に来，指導や助言ないし心理学的治療を求める人（クライエント client といわれるもの）

に対して，正しい診断をし，正しい指針を与え，必要の場合には，自から心理治療法をおこなって，本人の適応性をたかめ，問題を軽減し解決するのが臨床心理学者の仕事になる。

この仕事は，**診断と治療**の二点に要約できるが，診断も治療も元来は，医学用語で（だから，このような名称はよくない。ことに，治療を，医師以外に行なわせるべきでない，との論も出るが，これは各称上の問題でどうでもいいことである。そうして，心理学的診断や治療の場合には，医師による医学的検査を受けた上にするのが，当然の常識である），したがって，その意味も，医師の場合に準じて考えることができる。すなわち，診断は治療（指導，助言，措置などを含む）を予想して行なわれるもので，治療はまた正しい診断をまって，はじめて正しく行ない得る関係にあり，いわば，臨床上は，表裏一体をなす性質のものである。問題は，現在の段階で，この際，どこまで，科学的心理学の知見を，技術として使い得るか，にかかわる。臨床場面での手続きでは，診断は，いわゆる主訴（附添者や本人の来談目的）聴取にはじまり，生育歴，既往歴の聴取と記録（普通は，附添いの家人，ことに母親からきく。他の附添人や本人との面談を通じてこれを補うことはもちろんである）。次いで，本人と面接して，会話のやりとり，その間にみられる表情，身振り，態度などを手がかりとしての行動観察をする。つまり，行動観察と問診により，本人の全体像を把握するのである。つづいて，必要と思われるテスト（知能測定およびパースナリティ検査など）を行なって，客観的判定の資料にする。この際，テスト場面での本人の行動観察が，また貴重な診断の手がかりとなる。これらを，綜合して診断をくだし，それに基いて可能なかぎりの治療（指導，指示，時に行政的措置を含む）を開始する。これが，実地臨床での大まかなルーティンだが，短時間内での一回の診察だけでは，十分な所見が得られず，いわゆる経過観察や家庭その他への訪問観察による資料を必要とすることも多い。（これらを，ただ一人の手で実行することが，時間的にも，能力，労力の上でも，限定されるので，専門医，心理学者，ケース・ワーカー，作業療法士（Occupational Therapist，略語 O.T.）また言語療法士（Speech Therapist，略語 S.T.），理学療法士（Physical Therapist，略語 P.T.）など，それぞれ分業化された臨床ティームの編成が必要とされることになり，部分的には日本でも行なわれてはいるが，要請に応えるにはほど遠い現況にあることは，第一線で働く方々が，日常痛感していることである。これらの実際問題に深く立入ることは，当面の問題外とする）。これらの一連の診断過程を貫ぬくのは，すでに述べたように，治療方法樹立のためという問題解決への手掛りを得ることなのであるから，適応異常についての科学的体系とそれに即応する治療技術体系とが確立されていないと，診断の向うべき方向と拠点とが，支持を失ない，診断の意味が失なわれ，したがって，治療方法の確立も覚束ない結果に陥入ることになる。いうまでもなく，適応異常は，臨床場面では具体的な個体のあり方として現われてくるので，決して，適応異常一般，すなわち，概念化された精神薄弱とか，学校恐怖症とか，としてクリニックを訪れてくるものではない。この点では，医師の場合と同様で，臨床医の診断治療の対象になるのも，肺結核とか，精神分裂病ではなくて，個々の結核患者であり，分裂病者なのである。臨床面で取扱う場合には，医学も心理学も性質は同じであり，診断治療のやり方，進め方，すなわちルーティンも，ほぼ共通している。ただ異なるのは，診断治療を病者 patient またはクライエントといわれる個別的独立的存在者に即して適用し得る科学的知識体系が，具備されているかどうか，いいかえれば，診断や治療に使える道具がどこまで揃っていて，その使い方が，どこまで科学化されているか，の点なのである。

医学においては，診断学と治療学とが，ともに疾病学を媒介として，体系づけられている。もちろん，完成されたものとはいえないにしろ，臨床医が用い得るに足る道具立てが，かなりの程度具備されている。臨床医学の中では，一番科学化が困難で，それだけに遅れていると思われる精神医学においても，クレペリンによりたてられた疾病分類体系が根幹に残っていて，学者間に見解の相違があるにせよ，依拠できる共通地盤の組織がある。診断と治療も，これを中心として行なわれ，未だ，経験的習錬を基とする一種の勘の要求される面が強く働くとはいえ，ある程度の域に達している。ことに，最近のいわゆる精神薬理学の進歩や作業療法を取入れることにより，内因性精神病として（就中，精神分裂病）積極的治療操作を加え難かったものにも，一応治療の道が開けてきたのである。この精神医学も，精神障害という広義の適応異常を処置するのであるから，課題は臨床心理学と同一の水準，同一の平面上に位する領域であり，しばしば，二者は相重なるところがあって，実際上境界領域として紛争を起し問題になる場合もある。（しかし，これは，心理学者が，医師の協力を求め，生物学的身体面での指導の下に活動すればいいことで，既にのべたように，医師を含むティーム的編成の必要性を忘却しなければ済むことなのである。）

適応異常は，文字の示すとおり，生活のあり方に直接

的に関係する。身体疾患も，何らかの形で，生活活動に支障を与えるので，その限りでは同様の意味をもち，それ故に，病気とか，健康障害とかいわれるので，私が事新しくいうまでもなく，病気とか，健康とかは，人間生活のあり方についての——生をいとなむ上においての——価値概念である。ただ，，適応障害とか，精神異常というのは，‘ヒト’をして‘人間’たらしめると考えられている‘人格’のあり方，動物とは異った‘心’の所有者としての個人の価値的活動そのものに関連して，特に注目を惹き，理解の足りない世人をして時に蔑視の念をおこさせる理由となるのである。身体疾患は，人間を，いわば‘ヒト’として取扱う場合のあり方で，その価値も，‘ヒト’としての生物学的構造，体制上の末梢系に関連し，したがって個人の価値的活動態としては，次元が一段低いともいえる面，すなわち，‘人間’に使われ，‘心’の道具，手段となる面での価値と考えられる場合である。‘精神’は，‘人の心’であり，あとで触れるように，生そのもの，価値そのものであるから，精神障害が，‘心の病’として，‘身体病’とは，全く異った眼でみられていたのも，そうして，その名残りが，まだ社会の一部に消えていないのも，心と体とについての正しい科学的理解が，徹底していない現在の社会的状況に，主な理由があるのである。この状況を打破し，精神衛生とか，健康の問題を正しく啓蒙するには，‘心’とは何ぞやという問題に，さらに進んでは精神と身体との関係如何という古来の難問に，明白な解答を与えなければならないであろう。臨床心理に従事するものは，何らかのかたちで，この問題に見当づけorientationを行なう必要と義務がある。以下の小論も，この問題に対する私なりの答案ともいえるのである。

この基本問題に答える前に，話をもとに戻さねばならない。問題は，臨床心理学の実際場面の考察を通じて，その診断と治療の科学的状況を吟味するにあった。臨床という語が，医学から由来したことから，その方面を概観して臨床心理学の境界領域たる精神医学に言及した。そうして精神医学には，診断治療の指針をある程度まで与えうるに足る体系が，とにもかくにも，整っていることをみたのである。これに対して，臨床心理学は，科学的心理学から，どのように組合された道具立，どのような体系を選び出して使っているのであろうか。臨床心理学が，応用心理学として，心理学的知見を技術化して駆使する場合に，その科学性は，どこに保証を求めたらよいか，これが問題であった。臨床心理学が，心理学としての立場に立つとすれば，中心問題は，‘心のはたらき’に集中される。しかし，先きにみたように，今日科学化の道を歩む心理学は，行動科学の立場を中心としている。意識とか内省とかを，ワトソンの大宣言にみられた時ほど積極的に拒否はせず，内省から見出される概念も，操作し得る概念に構成して適当に取入れてはいるが，人間を行動体系の存在としてとらえ，この機制を明らかにすることが，行動者としての人の‘心制’を明らかにすることに連なると予想して自己の道を歩んでいるのである。中心になる研究法は，精巧化されたS-R方式（S-O-R方式）であり，その生産性は，すでにかなりの成果をあげたことにより保証されている。しかし，臨床心理学が，実地臨床において使用できる程度にまでは，このやり方による体系がすでにできているとはいえないのが現況である。さきに上げた適応異常の具体像（i）から（iv）にわたる分類は，きわめて恣意的で，分類原理が混乱し，非体系的で，遺漏も重複もあるが，このリストの示すものが臨床的に心理学者が取扱う主な対象をなすことには誰も異存はないのであろう。（i）は，さきに触れたように，特殊教育ないし福祉保護の対象者としてまとめられるものであるが，これらの人々の行動解明，行動変容（すなわち，これが教育方法につらなる）について，S-R方式による行動学は，どれほど応用可能になっているであろうか。皆無というのは，すこしひどすぎるかも知れないが，ほぼそれに近いと云ってよいように思われる。診断に用いられる知能検査法など一連のテストがあるが，これらは，S-R方式に関係なしとはいえないが，S-R方式を，主とする実験から帰納されたものとはいえない。精薄児の心制について，レビンがあげた‘かたさ’rigidityの指摘にしても，彼の理論によるいわゆる生活空間（心理的内界）の解釈としては面白いが，行動変容の方法としては，役に立たない。要するに，（i）の分類群に関する限り，実験方式は，まだ実用化されるだけの効果を生んではいない。だから，たとえば，私の講座が担当している特殊教育——ことに精薄教育の方法，精薄者の処遇などについては，50年前既に日本でも分っていたことを，戦後の潮流にのって実行化して行ったにすぎなく，ただ，養護学校や特殊学級の増加，福祉関係施設の増加，拡充につれ，臨床実習の場もふえ，科学的というよりも——経験的にえられたものを整理したという意味では，学問的といえようが——いわば多少秩序のある常識的技術を習得する機会を学生諸君に与えて社会に送り出すに便利になった，というぐらいの進歩しかない。石井亮一先生の，「白痴児，其研究及教育」は1904年出版で，実に62年前のものであるが，今日みても，決して新鮮さを失なってはいないのである。

同じようなことが，（ii）にまとめた教護ないし矯正教育の対象についてもいえる。ただ（iii）および（iv）につ

いては，(i) と (ii) ほど，簡単にはいい切れないが，科学的行動学としての心理学からの応用は，やはりきわめて限定されていると称して差支ない。この点については，後で，心理療法に触れる時に，もう一度考えたい。要するに，今日の臨床心理学の実用化に対して，**今日の実験心理学としての行動学は**，——科学自体として実りある進歩を跡づけさせるにもかかわらず——**診断治療に，依拠するに足る基礎学として役立ってはいない**といって差支ない。それにもかかわらず，(ii) の非行は増加し，(i) の特殊教育への要求もたかまり，学校恐怖症，自閉的適応困難児などの (iii)，(iv) 群に属するクライエントは，臨床心理学者の助言，指導を求めにやってくるのである。もうすこし待って下さい，とは云っていれないのである。これを実地臨床の場に，もう一度戻って，みてみよう。

前に触れたように，主訴の聴取，生活史の記録，そして，問診と観察，テスト，これがルーティンであり，この点は精神医学と変らない。しかし，基礎学的体系の欠如という断層がある。この診断と治療とを，表裏一体とさせるはずの体系なくして，診断と治療とをどう関係づけられるのであろうか。医学でも，受診にくる患者は，自覚症状を自己流に診断して，内科とか眼科とか，それぞれ選んで訪ねる。眼科医が先づ発見する内科的ないし脳神経科的疾患はかなり多いといわれている。これは，いうまでもなく，臨床医学が，生物学的所見にもとづく疾病学の体系をもち，医師は，この客観的検証に耐え得る生物学的所見に基いて，患者の自己流診断を是正するに足る根拠を発見できるからである。臨床心理学場面は，狭義の生物学的所見が，効果的でないところからはじまる。診断は，異常態を変容するための技術を予想するもので，これなくしては，意味を失なうことも，すでに触れたところである。7歳児の行動記録を一日中 (24 時間) にわたり，遺漏なく記述するには，435 頁以上の記録を必要として，なお足りない (現代心理学入門, 4, ラザラス：“個性と適応” 131 頁) といわれているように，生育史，生活史を聴取記録するとか，問診や行動観察をするとかといっても，ただ現象の羅列的記述，機械的継時的観察は，時間と労力の浪費に終るだけである。しかし実際上は，臨床心理学者が，適応障害のクライエントを扱う場合にも，科学的に検証し得るか否かは別として，何かしら，その適応障害態の基礎に横たわっている‘心のあり方’——その個人の心の力動体系を予想しつつ診断をすすめているのである。換言すれば，各臨床心理学者がもっているパーソナリティ理論に基いているといえるのである。しかし，**パーソナリティ理論は，まだ群雄割拠の相に近い**。なるべく共通な概念を抽出して操作的に構成し，精巧な関係概念を，さらに関連せしめて，できるだけ S-R 方式を，適用し易いようにしようとの努力が，学習理論の枠組に沿うてされてはいるが，信長，秀吉を経て家康にいたる中央集権制への歩みは，ようやくはじめられたばかりといえるであろう。だから，ここ当分は，心理学的臨床家は，自分のもつ知識と経験とを主な頼りにして，自からの理論をつくり上げねばならない。これが，支持的な異常態体系の欠如の意味するところであり，ここに，臨床家の‘人’としての個人的綜合のはたらきが要求される一つの基本的な理由がある。これはパーソナリティ機制の複雑さによる科学化の困難性に基くことであるが，この困難さは，科学的心理学の S-R 方式により，極めて徐々ながら次第に克服される道程を辿ってはいるのである。

しかし，心理学者が，臨床家として活動する時，どうしても避けられないもう一つの根本的な問題がある。これは，“ヒト(人)”そのものを対象にするという職務そのものの本質に由来する。臨床心理場面では，治療においてはもちろんであるが，テストの際でも，問診においても，ラポートあるいは，ラポールと通称される特別な対人関係が重視され，強調されている。このラポールは，フランス語で，19 世紀後半にフランスを中心として盛に行なわれた催眠療法の際に，施術者と被催眠者との間にみられる特異な心的関係を意味する概念として用いられていたところから転化したらしい。元来は，英語の relation と全く同意味であったようだが，医学的に医師と患者間の信頼関係，親和関係を示す語として，英米でもそのまま用いられ，臨床心理では，ことにこの関係が，重視されているのである。ラポートが，うまくつかない時には，クライエントに対する相談，指導，治療など一連の臨床的効果は期待されないといわれ，ラポートを巧みにつくり上げ，その微妙な関係の裡で，種々の操作を行なってゆくことが，カンセリングとか，心理療法を担当するものの基本的条件になっているのである。臨床心理学者もクライエントも，今さら指摘するまでもなく，“一個の人”である。私たちは，それぞれ奥田三郎という定年近き男として，石橋静子という 5 歳にもみたない少女として，固有姓名をもって生きている。生物学的にも，家庭環境も，経過した歴史的年月も，それぞれ異なり，それぞれ独立した存在であり，それぞれ別な文脈をもち，場所をもつ空間内で行動し，この二個体の間で行なわれる認知は，外から認められる表出運動に基く情報の感受 (表現受容) によるより道はない。情報受容をいとなむ主となるのは眼と耳とである。それにもかかわらず，少女は道で遭えば，私に笑顔で挨拶し，私も何か答

えながら笑顔を返えす。そこには，私どもが保育実験の場として設けた通称‘北大幼児園’での因縁を通じての親しみが生まれ，60年の年月を隔て，生所を異にした二つの個体の裡に，共通するある対人関係的対応が生まれているのである。これは，今は，コミュニケーションと一般に呼ばれるものの一形態で，私たちの日常生活は，この前提の上に立って営まれている。表情，身振り，言語そして文字も，視覚，聴覚を通じて捉えるところのいわゆる環境刺戟情報の集合にすぎないのに，その裡に，表現としての意味を認めて，他人の心を了解したものとして，互いに怪しまないで，対人関係を処理している。しかし，一歩突込んで，この個人間の了解がいかにして可能なのか，と考えると，なかなか厄介な問題になる。これは，心理学が，鮮明なS-R方式宣言をする前までのいわゆる内省心理学，あるいは意識心理学では，‘表現の理解はどのようにして行なわれるか’という問題として，また，哲学的には，‘他我と自我’または‘汝と我’という問題として，検討され，今日でも，この関係をどうみるかによって，哲学的にも，心理学的にも，いろいろの見解がわかれてくるのである。心理学的には古くは聯想（連合）作用として，その後類推作用（Analogieschluss）として，近くは感情移入（Einfühlung, Lipps）として論ぜられ，そしてシェーラー M. Scheler は，知覚作用（Wahrnehmung）とよび，‘人間知覚’を心身統合体として行なう基本的な受容のはたらきで，それは人間の社会的存在であることを示すものに外ならないとした。デイルタイが，了解 verstehen は，因果関係を定立する説明作用とは異るとして，自然科学とは方法論的に異質な，（了解的）記述的心理学を著わし，了解をもって彼の精神科学建設の基礎としたこと，シェーラーが，独特の倫理学をたてたこと，リップスの感情移入が，彼の倫理学，美学の基礎的方法となり，阿部次郎氏を通じて，日本にも深い影響を与えたこと，など，私には，昨日の如く想起される。西田哲学の中にも，とくに‘私と汝’を題として論じたものがあったと記憶する。要するに，私たちは，自分の心については，いつも意味とか価値が，いろいろな形の欲求としてうごめくことを自覚している。しかし，粗雑にみれば，動き，かつ，声を出す物体（活動体，動物）にすぎないはずの他人が，私たちと同様な心をもつこと，すなわち他人も意味や価値の世界に生きる‘心’をもつ人であることが，どうして確立されるかはやはり問題となる。正常な人間の心理においても，このように問題になり得るが，ことに精神異常などを対象とする場合には，しばしば，了解不能の表出行動形態に接することがある。このような，人の限界状況において，その表出をどう解すべきかは，ことにこれを直接的に診断治療する立場にあるもの——精神医学にとっては，決して思弁的，観念的な有閑事ではないのである。精神医学は，医学であるから，いわゆる‘精神’すなわち‘心’の問題を処理するにしても，生物学的立場を堅持して差支ない。多くの場合，了解不能のところに，換言すれば意味連関が消滅してしもうところに，生物学的機序の変化，ことに異常性の存在を推定するのである。これらのことは，精神医学においても，各個人としての医師の習錬の度と質とにより主観的に左右され得る余地を残し，それ故，‘勘’を臨床的に練磨する必要が，身体医学の場合よりも，より強く要請されているのである。

臨床心理学者は，自分が依拠すべき科学的心理学の未熟のため，はっきりした指標のない漠たる視界の裡に，**‘心’という古くして，いつまでも新しい課題に対して自分なりに解答せねばならぬ。**そして，この課題の固有の所有者たる‘個人’という難物と，何らのかたちで取組みラポートを通じ合わねばならない。臨床医も，同じく固有名詞をもつ個体としての人を扱う時には，心理学的臨床家と同じ立場ではあるが，そこには，人を‘ヒト’として扱い得る強大な医学体系——ヒトについての生物学の支持があることを私たちはみた。臨床家としての心理技術者には，これがない。しかも，取扱うべき固有名詞的存在としての具体的人間は，眼の前に立っている。心理学者は，いわば，二重の断層を，自分の力で跳躍し埋め合せて，診断と治療とを有意味に連関せしめねばならぬ。ここに，臨床心理学者が実地活動者として，固有の人格的存在としての‘智慧’が，要求されてくる。ラポートを通ずることが，心理療法の基本条件とされる理由はここにある。‘ちえ’は，経験によって磨かれなければならない。教育の現場に，福祉の現場に，カンセリング，労務管理，職場の対人関係の場に，人の生活する社会のいたるところに，心の持主たる具体的な人が動いている。ここには，臨床場面でのラポートに類縁的な対人的相互理解が要請される。これが，私たち臨床心理学者の‘ちえ’をみがく契機である。**‘ちえ’**は，私たちが，自分の心内に同化し得て，心の道具として使い得る経験的知識の力動系である。ここには，科学的に整理ずけられた知見を基幹にして，問題解決に役立つあらゆる経験の綜合がものをいう。経験は，英語の experience で，実験の experiment とラテン語源を同じくする，ともに‘こころみる’‘ためす’の意味から出ている，とは，前に引用した60年以前の石井先生の著書の示すところである。実験は，体験を操作し易い形でこころみためすこころ（mens, mental）み，といえよう。実験は，こころの二重

のはたらきで，経験をはなれては，権利を失う。経験の秩序づけは，世俗的にも，格言とか，ことわざ（諺）として残っているが，いつも，適用される経験の文脈に即して，再検討される必要がある。S-R 方式の利点は，この再検討を容易ならしめるにある。しかし，心理学の場合には，行動学は，認知し得る外部情報を手がかりとして人の内面的機制を明らかにし，これにより行動予測を可能ならしめるような法則関係を体系化しようとの試みであり，‘心’は，内面機制そのものの直覚に即して認知されるものである。行動学が，成人の域に達し，人の行動の機序が組織づけられ，体系化されれば，臨床上の問題解決に，大きく貢献することは十分に予想される。しかし，依然として，個の‘心’の問題，個の意識の問題は残るであろう。この問題は，外部情報源としての身体と内面的意識としての心との関係問題に連なる。この問題は，臨床心理学的には——という意味は，個人の生活活動に**障害を及ぼす既知範囲内**では，一応整理づけることが可能なようであるが，この整理づけに入る前に，もう一度，臨床心理学の実施活動の現況に立戻ろう。

さきに，臨床上の対象形態を，恣意的に i から iv までの 4 群にわけた。そうして，診断治療に当って，科学的指針を与え得る背景の欠如を強調した。しかし，実際上は，各臨床家が，科学的に検証し得るか否かは別として，それぞれ，ある程度の予備的見解をもって，ことに当っていることも附加しておいた。実際上，既述の分類で分かるように，(i) 群は，特殊教育領域のそれぞれの対象として，定義づけられている。この分類法を手掛りとして診断し，それぞれの学校なり，施設に送る指導をするためには，現在の検査法でほぼ間に合う。(ii) 群の場合は，やや複雑にはなるが，教護施設に送るべきか，家庭補導で足りるかの判別は，大まかには分類できる。しかし，(i) にせよ (ii) にせよ，立入って心性のはたらき方——以下，私は，これを‘心制’とよぶ。この命名は，体制に対応させて，後に稍詳しくのべるつもりである——を，変容させようとすると，つまり治療(教育)法を，具体的に指示助言し，又は自ら行なおうとすると，科学的技法が分っていないのである。経験の集積に即した‘ちえ’が，ものをいうのである。盗癖と俗称される行動傾向は，12-3 歳頃までつづいていると，なかなか治り難い。それにもかかわらず，いつの間にか消えることもある。結果（反応）から推定される諸条件（対人関係，食事，日常生活の充足をはじめ，現行の欲求理論，役割理論，レビンの生活空間の力動的場の変化，生活史を通じての学習理論など，それこそ，なけなしの‘ちえ’を振りしぼってともかく推定し得る条件を考えてみたことがあるが（北海道家庭学校の在校生ならびに卒業生が資料），とうてい私には，S-R 方式に近付かせられなかった想出がある（‘北海道家庭学校 40 周年’, 1955；留岡清男：教育農場，1965)。何らかの経路（環境刺戟の組合せの時間的継続が発達途次で与えた効果）で学習された行動パターンには違いないが，さて，その消去，変容（再学習）過程を，精密にという程ではなく，大まかにでも応用できる程度にと思っても，解析には成功しなかった。集団の雰囲気の影響，男子少年に与える寮母の影響など，多少浮彫りされる条件が，出てくるが，x^2 分布をすこしこじつけて設定し，検定に持込んでも，有意の成績は出なかった。しかも，これらのことは，100 年以上前から，常識として分っていることなのである。精薄教育においても同様で，教育心理学で教える学習成立の基礎的条件としての，したがって学習指導に際して考慮すべき要件としてのレディネスと動機づけ，また練習，訓練の必要性は，正にその通りであり，水増し教科教育ではなくて生活につながる作業教育を；基礎的生活態度のしつけを；直観教育，感覚訓練を，と並べられる大筋は，私のいわゆる学問的常識で，実際に教育（臨床）に当ってみれば，児童生徒に対する暖かい配慮を失わないかぎり，大過なく実施できるには違いないが，さて利用できる心理学的道具としては，知能検査，社会生活能力検査その他いわゆる能力関係テストぐらいで，ソシオメトリーにしても，10 数名の集団内での既知関係を，改めて確認する程度なのである。いわゆるパーソナリティ・テストにしても，せいぜい参考資料として，役立つにすぎない。

私は，臨床心理学者が，いわゆる精神衛生関係領域で活動するのに，心理学不用論を唱えているわけではない。そのような主張は，曲りなりにも，これらの事を講義内容としてきた自分自身を否定することである。私は，ただ臨床面での心理学は，まだ科学化が未熟であり，十分な学問的組織化をもたず，したがって，それを応用するには，そのまま技術化できる程度が限局されざるを得ないので，実際家として社会的要望にこたえ，当該児童の生活適応力を，できるだけのばす具体的方法は，臨床に当る人の‘ちえ’に，あるいは‘勘’と称せられるもので綜合されることが大きいことを言ったのにすぎない。このことは，学部内に，学生諸君が臨床経験をつみうる場が必要であることに連なる。つまり，卒業生諸君は，身にしみて痛感されている筈であるが，教育科学から，人に関する実証的経験の組織化を除外してしまう覚悟なら話は別になるが，児童発達なり，広義の適応障害児ないし障害者なりについて，学生時代に教育的臨床経験を‘ちえ’として，修得でき，でき得れば，未開発の新しい

知見を加え得るために，臨床的実習の場を自から操作できるように配慮する必要があることを強調したいのである。入院患者を不要とし，外来診療を拒否して，臨床医学の発展は考えられるであろうか。教育とか，人の行動変容への操作は，長時日にわたり，具体的な人格全体にはたらきかけるいとなみである。一定時日内での実験に，被検者を連れてくることや，ある時点においての横断面的研究をすることは，他の学校なり施設と提携すれば，不可能ではない。しかし，**縦断的，長年月にわたる教育的操作可能な場をもたないで，教育科学的研究，ことに臨床とか教育に関する心理学的研究を展回できるであろうか。**先きに触れた少女が毎日通ってくる私たちの保育実験室，その一部で行なっている異常児保育は，保育に当たる人件費の捻出が困難なため，目下縮少または，廃止の方向に傾いている。単に，狭義の実験のために，毎日愛児を提供することを一年も二年もつづける親がいるだろうか。子どもは，最もよい教育状況下で，のぞましい全人格形成条件の下で実験的に操作されなければならない。教育大学（学芸大学）附属校が，エリート・コースに連なっているのにも，定員不足の問題がからんでいるともきく。岐路に走ったけれど，この機会に，これだけを申添えておくことにする。

話を正規の軌道に戻そう。広義の適応異常群として分類したiとiiのグループ，ことにiは，私の教室出身者が教育者または福祉関係者として，一番多く活躍している対象領域であるが，(iii)と(iv)のグループは，いわば狭義の適応異常群で，第二次大戦後，急速に心理学者の臨床的活動を必要とする領域となって来たものである。これは，特にアメリカを中心として始まり，やがて日本にも，カンセリングとか相談というかたちで取入れられ，戦前からアメリカに根をおろし，精神衛生運動と結付いて，実用化され一般化されていた精神分析理論や手法が，種々に修正加工されたかたちで応用され，次第にノイローゼとかチックとか，従来精神医学で主として行なわれていた心理療法が，心理学者の手にも任せられるようになってきたものである。この背後には，精神医学者の数が相対的にすくなく，心理療法を根気よくつづけ得る余裕のすくないこと（日本では，いわゆる健康保険制度の点数問題もからんでくる）と，戦中戦後の社会的混乱に引続いての社会的情況の変動（技術革新を中心とする産業構造の変化，原水爆の開発，イデオロギーの対立，交通網のスピード化，マス・コミの発達，法律の改廃等等に基づく価値観の動揺）に基礎づけられた社会的要請の増大（青少年非行の数的増加と質的変化などに代表される）とがみられる。狭義の適応異常と名付けたのは，精神薄弱のように知能面での欠陥が主ではなく，いわば人間の深部，パーソナリティの基底をなす意志とか感情とか常識的によばれている心制面での異常が主をなすと想定されるものである。だから(i)群のように，環境からの情報を受容し消化する面で，欠陥をもつ場合にも，その input 処理の不完全（Sの不全）が，それに応ずる output の不完全（Rの不全）を結果し易い上に，多くの場合に，個性形成の基底の未熟さを伴ないがちなので，正常者の場合よりも，情意活動面での狭義の適応異常を起し易いのである。

人は，改めていうまでもなく，社会関係の場で生活しているのだから，適応というのは，その行動の場で要求される自分の行動のパターンを，社会的基準に合ったやり方で統制し具体化してゆく場合に名づけられる社会的価値上の概念である。しかし，他面では，人は独立存在として，自分の内面的心制をもつ。だから，社会的には適応的なパターン行動にみえても，内面的には不整合感があって，主体的には悩む場合もある。これも適応障害に数えられている。適応の概念は，健康の概念と同様価値概念だから，積極的具体的に内包を示すことは難しい。結局，‘生のいとなみ’がつづられてゆく過程を適応とよぶとでも規定するより致方ないことになってしまい，生活行動（問題解決反応）はすべて適応となり，きわめて模糊たる曖昧な概念になる。そろそろ操作的に定義しなおして使う時期になっている。いつまでも，馬鹿の一つ覚えのように，適応，適応といっているのは，いただけない。防衛機制，適応機制としての抑圧，合理化などが，不適応の張本人では，何のことやら混乱を招くばかりで，要領のいいヒトを氾濫させる原因にもなりかねない。有名なWHOの‘健康とは……完全に「良い」状態’とか，教育基本法で，‘教育の目的は心身ともに健康な国民の育成’とかうたわれているが，分ったようで，実際は具体的内容として積極的なものは示されていないことになる。しかし，消極的に，精神的不健康とか，不適応（適応異常）という場合には，上に記したように，社会的基準に合わずこれをみだすという外面的規定と，自己内界の矛盾に悩むという内面的意識的規定をすることができる。いずれも，個人の生のあり方そのものに直結する消極的，否定的，除外的，矛盾指摘的規定であることは，すでに誰でも知っている常識ではあるが，後の論義のためにすこし注意しておきたい。たとえば，先きに引用したラザラス：“個性と適応”（帆足喜与子訳）は，その第2章：適応のよさと精神的健康の問題（17～35頁）で，‘専門家は……精神的健康よりも，適応しそこねた徴候にあかるいために，不適応に重点がおかれている’（17頁）と記し，

‘判定規準をあてがうむずかしさ’を論じ（20～23頁）ながら，‘精神的健康の概念’を考察し（23～25頁）健全なパーソナリティについても（a）古くからの《満ちたれる牛》的方法でストレスのないことでよい適応を測定しようとするような消極的な見解では満足できなくなり，ゲーテのファウスト的伝統をとり入れ，努力とか不安に積極的な意味を附与し，（b）環境支配とか《目的遂行能力》を強調する見解が出てきたことを述べている。そうして，オットー・ランク；エイブラハム・マスロー；カール・ロージァズなどにも触れ，マーリェ・ヤホーダが，精神的健康の基準として，自覚，自己受容，成長，発達，自己実現，統合，自律性，欲求を曲げずに真実を認識すること，環境の支配などの特質をあげていると記している。そうして，《満ちたれる牛的概念》と，《積極性と目的遂行能力の強調》とは，異なった価値体系と哲学から生まれていて，前者は受動的に周囲の要求に適合する力を尊び，後者は，環境の超克，自己表現のためにこそ適合する人間をよしとみるとすると論じている。

以上要約したラザラスの記述は，私のこの小論の主旨を明らかにするのに便利である。私は，臨床心理学で，適応異常ないし不適応を取扱う場合には，《満ちたれる牛的適応》，すなわち，‘ヒト’としての生のいとなみを強く妨げるストレス（ホメオスタシスの擾乱）を消失せしめることに成功すればよいので，古い見解かも知れないが，私の臨床40年の経験は，これを支えてくれるのである。私は，これを，進化論的にみて，‘ヒト’ないし‘人’の立場での適応とし，臨床家の任務は，この水準までででいい。それからさらに高い，積極的な環境支配，自己実現は，‘人’から‘人間’へ，すなわち純粋価値と考えられる精神（これは，ヒトの心制の合目的的性を価値そのものとみて名付けた場合と考える）の持主たる‘人間’の立場での論議で，これは，治療の如き消極的方向とは逆に，積極的人間化の方向を推進する立場で，本来の意味での教育がこれに当るとするのである。ラザラスが，精神的健康に関する研究として引用している M. ブルースター・スミスにせよ，アッシュ（知覚判断における集団の圧力の研究）にせよ，ともに社会心理学的研究であることにも注目しておきたい。ラザラスの記述には，この‘教育的’積極面を強調したい気配がみられるが，実際的には，精神病理学的側面が主をなし，積極面の方としては，既に教育心理学での常識となっている社会的同化作用（これは教育作用の別名にすぎない）につき触れているだけで，これが，治療という実地操作とどう関聯するのか，歯切れはよくない。これは当然で，健康を積極的に証明することは，身体医学でも困難であり，いわゆる健康診断書は，認むべき病的所見なし，という消極的，排除的概念規定でなされていることも，注意しておくべき現実なのである。これらについては，ヤスペルスに触れる際，改めて論ずることにする。

臨床心理学における個性理論と心理療法

狭義の適応異常，すなわち情意面の異常を治療するために行われるのが，心理療法とか精神療法とかよばれるものであって，この基礎には，パーソナリティ理論，パーソナリティの基底をなす欲求をどう整理しておくかをめぐってのいわゆる欲求理論（または欲求不満，フラストレーション理論）がある。臨床心理学を支える理論的体系がない，と先きに述べたが，実際には，すこし多過ぎるほどの理論があるのであり，臨床家は，自分の‘ちえ’で，適当に取捨選択して使用しているのが，事実という方が正しい。ただ，私は，臨床心理学が，‘学’の名にふさわしい，客観的検証に耐え得る理論と術式の体系を持っているとはいえないと思うので，上のように結論しておいたのである。今日の心理学概論をみると，何らかのかたちで，動機づけとか欲求とかに論及していない教科書はすくない。岩波書店の近刊，現代心理学入門でも，3. として，マレー：‘動機と情緒’が，ラザラス（入門4），ロッターの臨床心理学（入門5）とならんで入っている。そうして，こうした領域の探究に，最も強い影響を与えたのが，フロイド Sigmund Freud（1856-1939）の精神分析であり，彼のリビドー理論であった。しかし，この影響力は，決して，彼の方法論にあったのではなくて，彼が問題を発見したことにある。フロイドの理論は，治療結果を手掛りとして解釈したもので，ニュートンが，林ごの落ちるのをみて（この話が作話だという説はともかくとして）重力発見の手掛りとしたのと同じ天才的発見ではあったが，ニュートンは，自分の発想を，S-R 方式に具体化して，この間の関係を経験的検証（実験）を経て確定したのに対し，フロイドの S-R 方式での S は，エジプス・コンプレックスであったり，その他リビドーの発達段階の各時期での id, ego, super-ego 三者間の葛藤関係で固着させられた精神的外傷と名付けられる各種各様のものであったりして，検証不能な不確定なものであるという相違がある。彼の使用した概念は，いずれも立証不能で，しかも否定もできない種類のもので，口愛期，肛門愛期とか，抵抗，昇華，スーパー・エゴなど，すべて解釈からつくられた概念である。ただ，フロイトが，熱心な臨床医として，自分の経験した治療効果の原因の吟味解釈に向い，生物学的観点から，心的決定論（心的エネルギーも，生物学的なものと考えて）を基本とし，

リビドーというエネルギーの展回過程，その間にみられる諸機制を構想し，一応説得力をもつ体系をつくり上げた，経験に即しての構想のやり方は，流石というべきものである。冷静に後からみると，実地経験を，恣意的に解釈し，解釈で措定したものを，因果的説明に使うなど，通俗心理学にすぎないとの批評を免れないが，フロイドの人としての‘ちえ’は，その後の問題発見への大きな道を開拓したのである。この無意識過程の発見を，生物学的にあとづけ，通俗的といえばいえる性的エネルギーという生命存続の基本にむすびつけ，‘夢’とか，‘言い違い’，‘忘れ’などの日常の経験的事実を巧みに解釈して，(悪くいえばこじつけて)綜合した経験主義と着想には敬意を表するに吝かではない。古典的精神分析と今は言われ，リビドー説は大きく修正され，または廃棄され，サリバンその他の新分析派を生じたが，この修正廃棄も，フロイドが発見し，解釈してつくった体系に即して行なった臨床成績を経験的に照合して，行われたものであることは，私たち臨床家が，銘記しておく必要がある。経験的事実を，新しい経験事実と照合することは，直接的には S-R 方式とは言えないが，experiment が，‘こころみのこころみ’である原義には整合する。現在の心理療法は，このようにして，私たちの‘ちえ’をみがいて綜合的に行なうより致方ない状況にあるのである。これは，‘心制’が，人間において，特別な機序になっていて，科学の手がまだ及び得ず，将来及び得ても，まだ残り得る問題の存在を示すものといえよう。

現在の心理学での欲求理論，またパーソナリティ論は，使用する概念を，できるだけ明確に定義し，構成概念として操作できるようにする努力をし，なるべく S-R 方式に倣う方向をとってはいるが，使用する構成概念の大多数は，フロイドの発見構成を泉源として，派生してきたもので，これに再吟味を加えて定義づけ，位置づけているので，ここにもフロイドの影響の大きいことが窺われる。ただ，フロイドが，余りにも，人の生物学的非合理的側面の解明に偏しすぎている点への反省が，広義の学習理論——人格形成は，学習過程の連続であり，この過程の行われる場である社会の規準を自分の要求(欲求)と統合させる行動のパターンとして学習しつつ自らの行動体系をつくり上げるという考え方——として，行動の発達，行動の再構成などに即して，条件分析，要因解析を行う研究方向に進んでいる。行動学として，種々の操作を試みて，それからの仮説を構成して，これをまた何らかの方法で検証してみるやり方が中心方向といえよう。前記した邦訳，ラザラスの‘個性と適応’をみると，この方向が要領よくしかも含蓄的に書かれている。彼は，第3章パーソナリティとは何か（36～46頁）において，パーソナリティを，理論的構成概念として措定し，第4章以下においてパーソナリティの基本的特質（一貫性，構造の発達，変化の可能性，統合性）と，典型的なパーソナリティの構成概念たる，動機と統制とを取上げて，解明しているのである。このような考え方を含んで訳者たる佐藤氏が，パーソナリティを個性と訳したのに私は大賛成なのである。私も，今まで個性といったり，人がら（人柄）といったりしていたが，これからは‘個性’に統一して定訳語としたい。この小論でも強調しているつもりだが，人が，パーソナリティが，‘個’としてのみ存することは，もうすこし強調されていい。たとえ，それが，共通的法則の定立（行動学）を目的とする場合においても同様な配慮が閑却されてはなるまい。

次に，臨床心理学で用いられている諸理論を概観してみよう。1963年に出た‘心理療法の諸体系’“Systems of psychotherapy”が，これには便利である。著者の D. H. Ford と H. B. Urban とは，ペンシルヴァニア大学のカンセリング科の主任で，副題として比較研究(A comparative study.)と附記されている通り，Sigmund Freud; Heinz Hartmann と David Rapaport, Erikson, Anna Freud 等の Ego-Analysis; Dollard & Miller; Joseph Wolpe; Alfred Adler; Otto Rank; Carl Rogers; Existential Analysis (Daseinsanalyse); Karen Horney; Harry Stack Sullivan の各体系，すなわち現行の治療理論の中でも，代表的とみなされる合計10におよぶ臨床的心理療法の諸体系が網羅され，詳細に検討されているのである。しかしこれらの各体系は，それぞれ自己特有の概念をつくって，自分の理論を体系化し，その独自の枠組の裡で使用しているので，直接的に相互の概念を対比して考察を加えるのには，不便が多過ぎる。それで，著者等は，できるだけこれら10体系のいずれにも共通的に使用し得るように定義づけ限定した諸概念を操作的に設定し，これによって設定した枠組み conceptual framework に沿い，この文脈に即して，各体系を一つ一つ詳細に吟味検討の上，比較対照を行ったのである。いまは，この書の内容を紹介する場でもなく，必要性もないが，ただ，著者等の態度は，できるだけ行動学的見地を堅持し，私が前に言った科学的心理学の観点から比較検討していることだけは指摘しておきたい。たとえば，行動を，観察する立場からわけて，R(何も推論を入れなくてもありのまま記述すれば分る外面行動)，r(主体的内観者にはよく分っているが，外からの観察者には推論が必要なるもの)，r_i(いつも，外部観察者と主体内観者との両方から推論されるもの)という風に，反応内容を

わけ，さらに各々を5段階——Rなら，生理学的，運動的，注意（感覚探索）的，情動的，通信的（言葉，書く，身振り）の5段階，之に応じて，運動的Rには固有知覚としてのr，注意的Rには外部知覚ならびに注意，覚知としてのr——に分けるような手続きをとっている。Sに当るのは，その場の状況下のでき事（situational events）で，これも分析的に考慮されている。こうして，比較対照の方式を一定した上で，行動発達は正規にはどのような道筋を辿るか；行動の乱れはどのような順序で起り，障害とみられる行動の特徴をどうみているか；治療の目標をどこにおくか；行動変容（行動のパターンの変化）を生ぜしめる諸条件（ここに行動変容の諸原理，変容を起させる技法，変容の順序，変容の転移などについての吟味も入る）をどう考えているか；行動変容の評価（行動変容の査定と治療理論の立証 verification）にどんなやり方をしているか，を主な問題項目として取上げ，これらの各項目をそれぞれの理論体系が，どう考え，どう処理しているかを吟味し，比較照合しているのである。

概括的に結果を拾えば，これら代表的な 10 の諸体系は，それぞれ，行動パターン体系が次第に学習されてくること（発達），したがって，適応障害事態も，広義の学習過程の結果であり，この解消は，広義の学習解消 unlearning と見做し得るという点では共通する。しかし肝心な行動変容の原理については，3-4 の体系に共通的なものもある（幼少時体験学習の重視など）が，これを全く無視ないし軽視する体系もあり，種々の概念が，各体系ごとに独自に，恣意的に，しかも仮説的文脈の裡で十分な検証を経ないままで使用されている。行動変容を起させる技法 technique をはっきり客観化している体系はほとんど無く，治療の目標も臨床家が自分で積極的に樹立するか，むしろクライエントに任せてしまう（ロージャースの非指示的療法）か，など各体系ごとに区々であり，到底客観的検証に耐え得る程度の筋道は，どの体系についても承認し得る程度に達していないといえるのである。著者は，自から臨床心理学の実地専門家であり，上の叙述でも分る通り，力動的立場に立つ行動学的心理学に立脚しているのであるから，きわめて親切なやり方で，各体系の特徴ともいえる新しい問題の見方や発見には惜しみなく拍手を送っている。そうして，適応障害と称せられる行動体系を変容させる理論が，心理療法の各体系で欠如しているのは，各体系が‘狭義’の学習理論をまだもち得ないためなのであって，現在の科学的行動学たる心理学の根底に流れる学習理論によって，一日も早くこの間隙が充足されなければならない，と結論しているのである。そうして，フォード等は，“心理療法の理論は，科学的心理学と結婚することによって，実り豊かな将来を産出し得る。しかし，心理療法も心理学（行動学的理論）も，まだ未熟で，結婚適令期に達していない。フロイド自身にしても自分の体系が完全だなどと認めていたわけではない。各体系がもつ誤りや曖昧さは，率直に認めなければならないが，余りにも融通性のない心理学（hard-headed psychology）に固執し過ぎて，偉大な体系を組織しようと冒険的な試みに歩をすすめるものに冷水をかけるのは考えものである。適応障害という事実は，単なる議論を通じて解決されるべき問題ではなく，経験的かつ実験的研究により明かにされなければならない。ハル Hull 流の（à la Hull）偉大な学説が出て，誰れか果敢な心理学者を刺戟し，いままで見逃されてきた事実を見付け出させ，検証の手続きを積み重ねることにより，より大きな体系組織を試みさせることを熱望する。科学的心理学の地平にも，心理療法の地平にも，そのような勇気ある愚者 courageous “fools” が何人か既に現われているように思われる。これには，多少無謀とも，向うみずともみえる勇気を要する”としているのである。

フォードの紹介に，すこし立入りすぎたが，彼の結論は，現在の臨床心理学が実地に当って依拠している精神分析各派，自我分析，非指示療法，実存分析などの現況と行動学を主流とする心理学との間に横たわる断層を，かなり鮮かに描き出しているといえよう。臨床家としての心理学者は，既にのべたように，自分の‘ちえ’で，検証に耐え得る体系の組織にのり出すか，そうでなければ，既成の治療法や心理学の知見をできるだけ有効に自からのちえで綜合して，問題解決に当らなければならない現況なのである。多くの心理療法に共通する理論的欠陥は，治ったという結果から出発して，不確定な先行条件（障害因と思われるもの）を推論し，その推論を検証の手つづきなしに確実なことと信じて，それに基づいて説明するところにある。それに，現在の心理療法理論の多くは，児童ではなく，成人を対象とした治療から生じたことや，精神医学領域から生まれたことも，留意しておいてよい事項である。

フォードが10の体系中に入れた Dollard & Miller の心理療法が，最も鮮明な学習理論に属することは，心理学関係者には当然予想されることであろう。この二人とも医師ではなく，しかも独乙とウィーンとでそれぞれ精神分析を習得したことは示唆的であり，実験心理学に社会心理学や文化人類学を関連させてまとめた彼等の‘Social learning and imitation (1941)’は有名である。しかし，彼等の理論は，学習が‘どのような風に’(how)

行われるかに力点がおかれ，どのような‘内容’が学習され，どのような‘内容’が学習されないかは，本人が生活史を通じて経過する環境状況のあり方次第に任されていることになり，したがって人は全く受動的に形成されることになり，ロボット的な存在に導かれかねない。もちろん，これを補うための努力はされているが，彼らの学習理論体系と整合的にはなっていないのであって，ここにも，現代の行動学的研究と心理療法の実際との間に存する断層が，明らかに認められるのである。

Wolpe の体系を，フォードは，交互禁止療法 Reciprocal inhibition therapy としてダラードとミラーの学習理論と区別して考察しているが，これも学習理論であることは；アイゼンク Eysenck の編著‘行動療法と神経症’(邦訳あり)に明らかである。この療法に関心のない人にも，アイゼンクが，パーソナリティの構造解明に，複雑な因子分析法を用いて，内向性，外向性，神経症性 neuroticism などの構成因子を措定したことは，広く知られている。アイゼンクは，この構想の下に，いわゆる問題行動（適応障害態）を分類して，個性上の問題（personality problems）と行為上の問題（conduct problems）とに大別した。この分類は，神経症性（ニューロティシズム）と，内向性，外向性とが，どのように組合わされているか，という在り方により分けられるもので，ニューロティシズムを水平基線として，内向外向の二方向に区分される。個性上の問題は，内向の方に入り，行為問題は外向の方に入るとするのである。アイゼンクは，ニューロティシズムは，自律神経系の素質的傾向として誰にでもあるが，問題行動として現実化する時には，このニューロティシズムに基づく反応が，外向的にか，内向的にか，どちらかに方向ずけられたかたちをとって生起する。内向性のものは，条件反応が早く起り，しかも持続する傾向をもち，外向性のものにはこの逆の傾向がある。いいかえると，条件づけの起り易い者は，内向的な行動パターン（内向的個性）を生じ易く，条件づけの起り方の遅い者は外向的個性の行動パターンを生じ易いというのである。だから，個性上の問題（たとえば，精神神経症，精神的葛藤など）を主とする行動異常には，条件づけの消去（これが Wolpe の交互禁止療法の原理）が必要で，行為上の問題（たとえば，ヒステリー反応，盗みなど）は，必要な条件づけ学習の不足なのだから，望ましい条件づけを重ねることにより，正しい社会的適応の仕方を辛抱づよく学習させなければならない。従来の学習理論の実地応用は，ほとんど，条件づけ消去（deconditioning）というかたちで行われ，その限りでは，それぞれ相当の効果をあげてはいるが，これは個性問題に関する場合であって，行為問題の方は，治療が難かしかった。これは，上記のように，条件づけが，つまり学習が，遅く，鈍いという慣性を打破しなければならないからで，このためには，最近開発されてきた向精神薬物の力をかりるのも一つの強い支えになる。中枢神経系に対する興奮性薬物は，内向化性効果 introverting effect をもち，抑制性薬物は，外向化性効果をもつから（Eysenk, H. J. (ed) Experiments with Drugs, 1963. Oxford: Pergamon Press）内向化性効果をもつ興奮性薬物が，条件づけを容易にすることが予測されるとの仮説をたて，この仮説が相当確実らしいことを Bradley & Bowen (1961, Amer, J. Orthopsychiat., 11: 92-103), Lindsley & Henry (1942, Psychosom, Med. 4: 140-9), Shorvon (1947, British, J. Addict, 44: 58-63) などの報告を引用して主張しているのである。なお，附加すれば，アイゼンクと共に臨床心理学者として活動している S. J. Rachman は，この行動療法内に，B. F. Skinner 1935 のいわゆる operant conditioning（自発的・操作的条件づけ）——Hilgard & Marquis の道具的条件づけ——を技術化して取入れ得る可能性を主張し，読字不能，言語障害，洩糞症 encopresis，さらに幻覚をもっていると思われる児童の行動分析にこのオペラント条件づけを試みたことをのべ，他の多くの臨床医その他の類似的方法による報告を引用評価している。ただ，彼は，この自発的条件づけを実施するには，特殊な装置と多くの実験（治療）室を必要とし，その上，時間を非常にかける覚悟を要する点で，実際問題としての難点があるが，言語を用いなくともよいことなど五項目にわたる利点を指摘しているのも（Howells, J. G. (ed): Modern Perspectives in Child Psychiatry, 1965, 145-146），注目に価するであろう。フォードが，交互禁止療法として独立させて取扱ったウォルプの治療体系が，アイゼンクの行動療法と命名した体系に入ることは，すでに記した通りで，邦訳されたアイゼンクの編著‘行動療法と神経症’の第 II 部の初めを，ウォルプの論文（‘心理療法効果の主要な基礎としての逆制止’）が占めている。（私が，‘交互禁止’と訳したのが，この訳書では‘逆制止’と訳されている。私のは，直訳で，逆制止としても，異論はない。）アイゼンクが，ウォルプの業績に勇気づけられて，（Wolpe は，南アフリカで生れ，同国の医大を出た精神科医師で，彼の症例は，主としていわゆる不安神経症領域のものである。彼は，最初の頃傾倒していたフロイト説が事実に合わないので，やがてパブロフの条件反射説の研究に入り，さらにハルの行動説に接して自分の療法を基礎づけたといわれる。今は，Virginia 大学精神医学教授）共に，行動療法を，学習理論を基礎

として発展させたのであるが，私の知るかぎりでは，アイゼンクを中心とする一派の理論と技術とが，臨床心理学畑において科学的心理学を実際の臨床活動に応用し，技術化した点では，現行水準での頂点をなすとみなせるので，すこし立入って述べたのである。換言すれば，アイゼンク一派が，学習理論に基づく治療技術を，ここまで具体化し得たことは，さきにフォードが結論としてのべた言葉をかりると，心理療法と行動学とは，そろそろ結婚適齢期に入ったのではないか，アイゼンクの行動療法理論体系とその技術化の中に，すでに二者のハニムーン（蜜月）の姿が，ありありと認められるのではあるまいか，とも思わしむるものがあるからである。しかし，文化人類学の示すように，結婚適齢期といっても，文化のあり方に対応して分散度が大きい。私たちの置かれている科学的文化状況の裡では，未だ蜜月に通ずるデートへの模索時代のように思われる。そうして，月下氷人の役は，依然として，臨床家としての心理学者の‘ちえ’にまたねばならぬ。私が，最も科学化された療法と見做す行動療法にしても，ウォルプの症例報告をはじめ，‘行動療法と神経症’の中の記載例をみれば分かる通り——たしかに，理論体系を背景に技術を案出した進歩は認められるが——，各事例を診断する際に行われる手続きをみると，まだまだ生活歴聴取や面接中に働らく臨床家の経験的ちえ（主観的総合）に頼る比重が大きく，したがって，具体的に条件づけを消去する方法手段を案出することに，すなわち治療の具体化に，診断そのものが，客観的，一義的には結び付いてはいないのである。‘経験的ちえ’とか，‘主観的総合’とか，‘勘’といわれるものが，具体的な固有名詞をもつ個人を取扱う場合には，必らず働くことは，臨床といわれる場合でも，教育とか，人事問題といわれる場合でも，いつも具体的処理（操作）に際しては共通して認められ，この点では，身体医学でも臨床心理と同じ事情にある。しかし，医学には‘体制’について客観化され，しっかりした体系的支柱があるのに，臨床心理では，それに該当するものが甚しく貧弱な状況にとどまっていることは，すでに繰返しみてきた通りである。つまり‘心制’についての客観的秩序づけが，まだまだ未熟なので，したがって，客観的に技術化し，診断から治療へと具体的に使用し得る確実な道具が，不十分な上にその整理も恣意的にされており，てんでんばらばらに混乱しているのである。その上に，‘個’の問題も，身体医学の場合とは異なった重さをもってくる。

適応異常問題は，つねに，‘生きる生き方’そのものの在り方に直結し，第一義的な意味で，価値に直結する。身体医学の方は，‘生きる生き方’のいわば，道具としての‘身体’に主として係わり合い，価値的在り方としての人間生活にとっては，道具的，手段的関係の意味の方が濃くなる。この意味では，語弊を覚悟していえば，第二義的な価値問題が，身体医学の対象となる。（第二義的といったが，これは，後でみるように，人の働きの必須条件 sine qua non なのである。）肢体不自由者，肺切除や胃摘出を受けたそれぞれの人は，‘体制’としては，正常ではない。しかし，‘心制’としては，健康であり得るのである。ところが，適応異常は，その語義自体の意味により一義的に健康であり得ない。ことに，その度が著明で，心制の統一性の乱れが，誰の眼にも明らかなような著るしい適応異常，すなわち狭義の精神病者は，存在価値そのものの低下ないし消滅とみられて，普通の人間とは異質的な存在とみなされ易い。世間一般のいわゆる大衆が，精神病者を特殊な眼でみ，そのまなざし（眼指し）の裡に憐れみと軽侮の念とを漂わせているのにも，一応の理由はあり，精神衛生運動の一つの壁になっているともいえよう。この意味で精神医学と臨床心理学とは，ともに人の価値そのものを対象とする。価値は，具体的には，K. M. なら K. M. というそれぞれ固有名詞をもつ主体としての人間活動を抜きにしては在りえないからである。臨床心理学は，適応異常者を，異常でないものにするためには，人間の価値態様を操作し得る科学的技術をもたねばならない。技術を導出するための科学的理論を持たねばならない。」

しかし，価値の問題は，科学法則の定立とは，論理的文脈を異にする問題として整理されて来た。これは，カント哲学の最大功績とされるもので，カント以後，ことに新カント派といわれるものをはじめ，何らかの意味で，カントの批判主義を消化した上でないと，生産的な哲学は生まれなかったことは，哲学史の示すところである。当為 Sollen の問題と存在 Sein の問題とを，如何に統一し，どう調和させるかは，古来から現在にいたる哲学上の基本問題であることに変りはない。そうして，臨床心理学は，上述したように，人間という価値態に直接に係わり合い，適応異常という価値低下態を治療——すなわち，科学的に操作——する任を負うている以上，何らかのかたちで，この問題の整理を回避することはできない。私も，精神医学の臨床や心理学的臨床を中心として，自分の社会的生活史を綴ってきたものとして，この問題から逃避するわけには行くまい。そうして，定年退職を間近かに控えた今日は，これに答えを出すのに，ふさわしい機会でもある。私は，私なりの答えを出さないと，ただ漫然と他人様の生き方に干渉し，漫然として自分の生をむさぼり，曖昧模糊の裡に，白昼夢をつづけてきたこ

とになる。臨床心理学における人の問題は，反省回顧を中軸とする私自身の学習過程，行動体系パターン形成の問題に直結するのである。

今日のいわゆる臨床心理学に，私が実際的に係わりをもつようになってから，数えてみると40年以上になる。1925年春，22歳になった私は，自から知らずして臨床心理学に踏み入ったのである。当時すでに Lightner Witmer が，臨床心理学的方法を唱導し（1896），Clifford Beers が，精神衛生運動を起して（1908）かなりの年月を経たことなど，全く知らなかった一介の青書生にすぎなかったにも係らず，当時の東大心理学の動向に適応できず，心理学に対し多少軽侮の念をいだくことにより自己合理化を行ない，私は逃避を医学に志向した。そうして，東京府松沢病院の心理室に医進コースへの予備校生の積りで就職したのである。心理室の仕事は，精神異常者を心理学的テスト法で診断することが主であったが，東大からの臨床講義用患者さん迎えの車に便乗して毎週臨床講義に出た。エンーツェファリーティースという音の連なりが，辞書をひき得る言葉として，Enzephalitis として，まとまるまでは，何回か聴き耳をたてることを要した印象が鮮かに残っている。1931年，今度は医師として精神異常者の治療に従うことになった。戦後（1946年）より教護児の診療に当り，1949年から臨床心理学者（?）として，北大に職を奉ずることになったのである。この間，数千に上る患者さんを，（効果の有無は別として）診療し，教師として曲りなりにも講義と指導をしてきた。この40年間，自分の能力に疑問をもち，医師として，また教師として，その場に適当かどうかを問うたことはしばしばであった——と，いうよりも，不断に連続して今日にいたっているという方が正しいが，自分の臨床ないし教育（私の立場では，この二つは，本質的に同一であった）の方法論的反省を真剣に考えたことは乏しかったといえよう。もっとも，私が，心理学科卒業論文の題目としたのは，‘他我の認識について’であって，当時の心理学に適応できず，医学に逃げ込むつもりだった私にとっては，逃避先きの精神病学が，精神異常をどのように適確に把握し，解析し，人間認識をどう科学化しているかが，多少心配だったのかもしれない。今から考えると，一種の予期不安があって，いわば，不安神経症の一型だったのかもしれない。恐怖は，はっきりした特定の対象ないし事象に関して起り，不安は漠然として特定なもののない時に起る，という，常識的ながらスマートな使いわけを知ったのは，かなり経ってからであり，自分では，問題のたて方自体が，はっきりしていなかったことに気づかなかったのだから滅茶な話である。喜悲劇に終ることは，今になればはじめから予想されてたのである。この当然の結果として，本人は大真面目でも人工的な知的不安（つまり経験に基づかない観念的，技巧的問題意識）の霧の裡を彷徨することとなって，認識論的論理と先天的心理作用とが，ごちゃごちゃになったりして，‘枯尾花’すら発見できず，心理学とも認識論ともつかない朦朧裡の幽霊そのものを，約6ヶ月の悪戦苦闘の末，ゆらめく姿のまま差出したことがあるにはある。松本亦太郎先生が，苦笑いされた様子が，ありありとみえるようである。その後，8年たって，医師として仕事をしている時，岩波教育講座の一部に大胆不敵にも‘精神治療学’Psychotherapeutics と銘をうったものをまとめて出したが，この時は，‘健康’の概念と，それから導き出される‘治療’の意味を，私なりに一応確かめたぐらいの反省しか，試みなかった。どういう論議をしようと，どういう概念規定をしようと，それが，私たちの経験に忠実に即してなされるなら，何かしら産出的なものが残るに違いない。ただ，経験といっても，それこそ‘広うござんす’で，生まれ故郷，うじすじょう（氏素姓）を，すこし洗っておかないと，自からつくった陥穽に落込んで，二進も三進も行かないハメにぶつかる怖れがある。私の‘他我の認識’問題の提起がいい見本だと思ったので，学生諸君のため，あえて述べたのである。否，これは，私自身への自戒であったようだし，この小論をまとめるに当って，再び反省を新たにした自戒なのである。

独り合点の回想に逸脱したが，論を，もとへ戻そう。私の命題は，臨床心理学が，価値態としての人間を一人の心を一操作するのに，どのようなやり方でやっているか，を問うことにあった。そうして，私自身の臨床経験に即して，この解答を出すことにあった。私は，すでに，一般論として，‘臨床家のちえ’を答として提出しておいた。これは，極めて平凡な常識で，事実をただ言いかえたに過ぎない。すなわち，説明（因果的充足原理）ではなくて，すこし秩序づけた記述にすぎない。次ぎに必要なのは，この‘人のちえ’のなかみ内実の吟味である。

私は，臨床経験という常識から出発する。私は，医師免許証を持っているから，臨床心理場面でも一応身体的所見の有無を，自分の手で確かめる手つづきをとることができるが，すこし立入った所見を必要とする時には，それぞれ専門家の判定を煩わす。身体的所見が，一応否定された時，臨床心理学的処置，つまり心理学的診断と治療がはじまるのである。これが，心理療法とよばれる手法であるが，この特徴は，医学で慣用する物理的，化学的操作を用い‘ない’で，クライエントの心のあり方を変えようとする試みというところにある。要するに，

いわゆる心理的方法で‘心’を操作しようというわけであるが，その心は，一般的普通名詞としては，身体と別なあり方をとるものとして措定されてはいるが，現実には，上に述べたように，三郎とか静子とか K. M. とか，特定な姓名をもつ個人——そうして，生きている個人のあり方としてより以外には，私たちの経験に入ってこないのである。このことは，臨床場面に限らず，誰でも認める経験的事実である。すなわち，常識の教えるところによれば，生きているということは，特定個人としての身体的現象と心理的現象を通じてより以外には，経験されず，したがって感覚，知覚などが関与する情報としての刺戟源ともならず，私たちには，関係のないものになる。全然関係のないものは，私たちには，存在としては認められない。だから存在しないことになる。全然関係のないもの，いわゆる無縁のものは非存在である。しかし，関係のあり方は，多様である。常識的に，私たち自身は，自分の心をもち，自分の心は自分に一番よく分っているつもりでいる。そうして，心がはたらくことを通じて，自分は生きていると思っている。しかし，自分の生きているのは，身体のあり方に支えられていること，身体に大変化を急激に起させそうな事態は，反射的にさけようとする（自動車にぶつかるまいとする）ことなどをよく知っている。‘いのちあっての物種’という諺は，心よりむしろ身体の方に比重をおく庶民のちえともいえよう。

ごたごたと冗漫に述べるのはやめて，常識の示すところを整理しよう。私たちは生きている。姓名をもつ独立存在，“個”として生きている。生きているあり方は，身体現象としても，心的現象としても，私たちの常識になっていて，この共通前提の上で生きている。その上，私たちが，お互いに人間として係わり合っていることを当然なこととして生きている。総括的に，社会，文化，科学，芸術，経済，法律，政治などとよばれている概念が内包することがらを，大なり小なり格差はあっても前提して生きている。そうして，身体も心も，幼い時は，小さく弱く，それが年月の経過と共に，大きく強くなり，大人となって子孫をつくり，やがて老いて死んでゆく。死は，生きることの終末で，したがって身体現象も心的現象も消えてしまうことを心得ている。この人の一生を支えるのには，栄養が必要で，このため人間以外の動物，植物，無機物，日光などが不可欠な要件であることも，常識として心得て生きている。

常識，常識とならべたて，これを私のこの論議の出発点，根拠に前提したから，常識の定義がそろそろ必要であろう。‘**常識**’とはその社会をつくっている個人，個人が共通的にもっている生活のちえとでも定義しておこう。だから，常識的でないというのは，その社会群に共通する生の活動ルールに合わない場合である。‘**ちえ**’というのは，個人が生きる上での問題解決に用いる力そのものとでも定義しておこう。念のために，手持ちの辞典をひいてみたら，ちゑ（智慧）：完全な生活の目的と之を可能ならしめる手段とを認識する識見，従ってそれは実践的認識である。英 Wisdom, Prudence 独 Weisheit 希 Sophia 拉 Sapientia とあり，プラトンは‘個人の最高能力たる理性の徳’とし，アリストテレスは，これをさらに‘純粋思惟活動 sophia と実践的即ち欲望を調和統御する道徳的知見 phronêsis とに分け’，カントは‘意志が，人生終局目的，最高善に和合するを智慧と呼んだ’（岩波哲学小辞典）とある。「言海」や「ことはのいつみ」には，智 と同じ，とあるので智をひくと，「五常の一，三徳の一。心に物事の理を敏く覚りて是非を分別するを得る力」としてある。英語では，wisdom よりも，prudence の方が，私の使う‘ちえ’と語感上合いそうなので，英語の字引きで，prudence を当ってみたら，‘行動及び計劃における慎重さ（通例，用心・警戒・節約の意味を暗示する）’とあって，ラテン語系で，provide (pro-videre ... fore-see) と語源を同じくするらしい。provide は，‘用意する’‘考えておく’，‘備えをする’，などの意味をもつことは，かねてから知っているので，やはり wisdom より，fore-seeing から出て，get ready というような意味をもつ prudence の方が，生命の基本的・個体的・統合的な実践力として，私が‘ちえ’を定義したのに近いような気がする。「哲学辞典」から引用した方の定義は，あとで触れる機会があると思うが，生命活動としての‘ちえ’の最高に（進化）発達した姿で，臨床心理において，‘人’を扱う今の私の立場からは，高尚すぎて，私の‘ちえ’で，そこまで人を高等化するのは，まだすこし先き走りすぎる。しばらく敬遠しておくことにするが，‘実践的’とか，‘和合’という文字が用いられていることに注意しておこう。‘ちえ’の詮議に手間をかけたのは，現在の臨床心理学においては，臨床家のちえのはたらきが占める重さが，非常に大きいことを，上でくり返し述べたのと，これから，すこし整理を試みる心身関係から，ちえの構造を多少は解明してみたいと思ったからである。ここで，常識の大道に戻ろう。

常識の示すことを，もう一度要約すると，生命は人においては，個体化された形態をとり，社会関係の裡で独立的存在として心身二面にわたる現象を示すということである。心理学で，人は，生物—心理—社会的存在だ，といっているのも，全く常識にかなうといえよう。しかし，私は，生物学的な立場から，生命態の在り方を検討する

ことが，当座の主目標なので，社会関係を主とする方面の人は，後まわしとする。

生命態が，身体的存在様相，心的様相，そしてこの個的統一体としての活動以外には，認められないことは，ヒトも含めての生物界全体が示すところであるから，生命のあり方は，生物学の成果にもとづいてみるのが，科学に志すものにとっては本筋であろう。そうして，人間も，ヒト Homo sapiens として取扱うかぎり，生物学の知見や法則の延長線上にあるとするのが，今日の常識ともいえよう。しかし，'ヒト'は同時に'人間'であり，くどいようだが，姓名をもつ固有の独立的存在であり，意味とか価値を自らの裡に含蓄している特異なヒトである。これも，常識の教えるところで，この特異的個体であるところから，臨床心理の問題ばかりでなく，形而上学だの認識論をはじめ，七面倒くさい——それ故にこそ，逆にみれば，その人の生命を賭しても悔いない——哲学だの，概観することすらも次第に困難になってきた程の多種多様な科学の分野や生産消費の様相が生じてきているのである。しかし，人間の不可欠要件として，'ヒト'があり，ヒトについての知見は，'人間'についての知見よりも，はるかに科学化されているから，人間を科学的に操作（臨床心理の中心問題！）する時には，この事を十分に心得た上で，臨床家の'ちえ'を働かせ，ラポートを最良水準につくり上げると同時に，診断，治療の方法案出に努力しなければならない，というのが，常識にはじまり，常識に終る私の 40 年間の臨床心理学的立場への反省であり，結論なのである。

しかし，これだけでは，余りにも蛇尾に終りすぎ，他我認識という幽霊の正体，枯尾花を探し求めて悪戦苦闘した40年前への逆戻りにすぎない。私自身は，残念だが仕方がない，であきらめもつくが，せっかくこの間に多くの学者の努力で進歩したヒト科学の歩みを無視する罪を免れまい。そこで，ヒトについての科学的成果を，すこし眺望してみることにする。

ヒトは，生命態として生きている。その認識は，からだ(身体)と心という外，内二面にわかれてされる。**私は，すでに，触れたように，身体のあり方を'体制'とよび，心のあり方を'心制'とよぶ。**ともに，生命のあり方ではあるが，**'体制'は，構造的なあり方として，**換言すれば，空間的拡がりをもち，質量をもち，従って私たちが，自然科学的方法で，認識し計測し得る構造を示すものとして，認識される。生命を括弧の中に入れて考えれば，体制は，物質の秩序ある配列，布置なのである。これに対して**'心制'は，はたらきとして認識される。**はたらきをそれとして認識する作用の根源は，生命そのものに内在すると推測されるが，これはあと廻しにしておいて，自然科学的には，構造体と構造体との間の関係のあり方として，換言すれば，形あるものと形あるものとの布置間にみられる変化を指標として，この形あるもの（物質，物体，構造など）相互の函数関係を通じて，はたらき（作用，機能，行動など）として認識される。心制は，生命を括弧の中に入れてみることが，その本質上無理でこの点体制とは異なるのであるが，無理を犯してあえて生命を括弧内に入れて推論をすすめると，物質そのものに内在する性質といえるかもしれない。形相なき質料（アリストテレス）としてのヒューレー Hulê とか，フッセルの素材的要素 hyletische od. stoffliche Data とか，また生気論 Vitalism は，このような'心制'の本質と体制との関係から主張されるのであろう。自然科学的手法で——これが S-R 方式の基本——進んで行っても，どうも同じようなことになるらしい気がする。（よく分らないながら好奇心に駆られて，素粒子論などみたり，その構造や性質を知る方法は，弾性衝突法とか非弾性衝突法とかによるとか，そのために陽子加速装置（シンクロトロン），霧箱，泡箱などが必要だとか，プランク恒数とか，特殊相対性理論から一般相対性理論へとか，不確定性原理だとか，光子は波でまた粒子だとか，万有引力も素粒子でつくられているとも考え得る（ディラック）などとの文句にぶつかると，'はたらき'と'構造'，'心と物'と区別して考える考え方そのものに，何か，伝統的なとらわれがあって，妙な気がしてくる。結局，科学的に解析してゆくと，お天道さま（太陽）があって，私たちも出てきたので，科学的認識とは別な，意味とか価値追究の立場から，そうして'内観'とか，反省的直観などをたよりに，唯心論といっても唯物論といっても，生命哲学といっても，どうでもいい名称上の相違だけになり，ただ，心''物''生命'に染みこんでいる文化的歴史的伝統に規定された"常識的"語感で，左右されてるように，私の常識には響くのである。これは，余談にすぎない。）私は，論理学や認識論も私の常識で（私の経験，知識の範囲内で）考えるより致方ないが，ともかく，認識は，何か対象（ドイツ語の Gegenstand はうまい表現）措定からはじまるわけで，そこには，何かしら弁別でき選択的に受容するはたらきがあり（意識の内在的でかつ非実的なノエマにノエシスが具体的に関係する，と哲学的現象学（フッセル）などでいうらしい），この'はたらき'を通じて対象化されたものは形あるものとして取出されてくる。だから，はたらきは，対象措定として，対象は，はたらきによって，認知（私たちの生そのものに意味ある関係者として）されると思っている。こうした

考えは，上にも触れたように有名なアリストテレスの形相と質料との関係などの概念にも出ているようで，それ以後も，主語賓辞の関係などとして，難しい論議が積上げられ，ブレンタノの記述的心理学で対象の指向的内在が主張され，フッセルはこれを現象学的に純粋化したと，うろ覚えに知ってはいるが，つきとめて考える興味，必要性を感じないので，嗤われるのを覚悟で，私の常識を曝らけ出しておいたのである。

ともかく，体制に即して心制が認識され，心制に即して体制が認識されると私の常識は教えてくれる。心身統合体という表現は，誰でも認めている人間のあり方なのだから，当然のことをいいかえたにすぎない。しかし，何か，まとまったものに支えられないと——常識語としても，‘手掛り’というし，行動主義的心理学でもcueなどという——私たちの認識は進まないようにできているようである。認識論的に，体験作用とか事行（Tathandlung）とか，判断——根源の判断，根源の根源とかから出発するにしても，**ur-teilen 原初分割というドイツ語の含蓄を，生のいとなみそのものとするのを正当化する**ように思われる。この考え方が，認識論的に正当化されるか否かは別として，形づけられたものが，生のはたらきの具体化で，この具体化されたものが支持点となって，はたらきを推進させる。この生の不断のいとなみが，‘体制’として結果され，‘心制’は‘体制’に支持されてはたらきつづける。‘心制’の認知は，生命自体により内面的に把握され，それは，カントのいわゆる感性の先天形式の一つである時間形式のみを有する。‘体制’は，空間的形式を主としてとらえられる。だから，‘体制’は，主として眼でとらえられ，‘心制’は，継時的現象として主として内面的に直観される。‘心制’を，すなわち，はたらき（動き）自身を，外面的にとらえ，認知しようとすると，どうしても，空間的対象の間にみられる変化としてよりほかにはとらえようがない。はたらき（動き）は，外面的には，空間的存在の支持——空間的存在関係のみだれ——がなければ，それとしては認められない。感性の先天形式といわれる時間性と空間性とが，いつもこびりついているのである。（物理学の運動概念；Wertheimerのφ現象など。生物では，能動的といわれるものがあるが，外面的には，時・空の形式を不可欠なものとする点では変らない）Cogito ergo sum（Descardes）は，なるほど認識主体の出発点らしいが，存在認識には，Respondeo ergo sum（Eritz Heinemann）が必要であり，反応や応答は空間的支持なしには行われない。かりに行われても，認められないから行われないと同じだ。時間だけをたよりにやってゆくと，どうしても，内的とか，意識とか，純粋持続とか，ということだけになり，個体内のはたらきだけになる。形相なき質料といわれるヒューレーの正反対で，質料なき形相，ノエシスnoêsisのからまわり，ユーレイ（幽霊）にもなり得ない。はたらきを，空間とは無関係に，時間関係だけで，うまく秩序づけて行って，筋の通った体系をつくろうとする試みは，私の知る限りでは成功したことをきかない。経験論（経験主義）に対立する意味での理性論（理性主義）にしても，言語（ことば）を使う。抽象，具象，象徴に（たとえこれらが訳語にすぎないとしても）‘象’の字が共通的にみられるのも，示唆的である。私は，生命態は，進化と称せられる方向をもったはたらき（心制）が，形体として具現されたかたち（体制）をとることにより，私たちに認知され易くなり（S-R方式の適用），はたらきは，この体制を手がかりとして，さらに高次化されて行く。だから，はたらきはその体制化を維持する低次（下部）構造間の函数関係として認知され，規定され，この心制と体制との二面の統一態として，具体的に生物となって私たちの眼前に顕現し，私たちはこの生物のあり方を，また手がかりとして，生命態のあり方——生のはたらきの方向や意味——を，理解することができると考えるのであって，これが，私の常識であり，今日の生物学の常識にも合っていると思うのである。

生命のあり方——生命態につき，拙ない冗舌を弄したようで，すこし面はゆい気がするほどであるが，これは，心身関係の問題は，昔からやかましい大問題で，心身平行論とか，同一論とか，交互作用説とか，難かしい論議をよび，今日でも，真正面から，この問題にとり組むと，ちっとやそっとでは済まなくなる怖れがあるからである。私は，ただ，私の常識の根拠を，この機会にすこし洗ってみたのに過ぎないが，生きている物体的構造布置が，‘体制’として，把握され，これのはたらきのあり方が，‘心制’とよばれるあり方で把握されると常識的に考えて悪いことはないように思われる。かえって，もともと統一態であった——全体的統一ゲシュタルトであった生命を，何か部分的な物と心という二つのものにわけて，‘生なき作用と物体’，‘生きてる作用と物体’，‘生きている作用と生きている物体’（もう一つの可能的組合せである‘生きてるはたらきと死物’との関係は流石がに論議されない。これには，死についての論があるだけである）というように別々に論じた上で，二者を結合ないし有機的に統一させようというのは，論の進め方が，逆なような気がするのである。心理学領域の学者で，物心同型性Isomorphismを提唱したケーラーKöhler, W.が，いわゆるゲシュタルト学派の雄将であることは，私

が申すまでもないことだが，何か皮肉なような気もする。というのは，統一的生命態，つまり心制体制渾然態，心体的ゲシュタルトとして認めれば，いまさらイソモルフィズムを改めて考える必要はない。私の方が，余程すなおなゲシュタルト論だといえそうだからである。もちろん，私が今，当面の問題としているのは，'ヒト'としての'人'であって，ケーラーが，問題にしているのは，'人間'としての価値 value であり，高尚さの次元——認識の次元といってもいい——を異にすることを知らないわけではないが，彼は，'To this extent, therefore, vision and its cortical correlate are 'isomorphic' (P. 217) の語でも分る通り，視覚で例示し，また，記憶痕跡などを持出している。そうして，'要求性' requiredness, '有機体の適合性' organic fitness などへの論及が，内容を占めている。こうみる限り，私のヒトと実質的に，それほど差がない気がする。いま，頁が探し出されないので，原文を引用できないが，進化論を信ずるものなら，誰でも，この同型性を当然とするだろう，という意味の語があったと思うが，私も，これには全面的に同意する。しかし，物理学が，新物理学（微視的）と古典物理学（巨視的）とに一応わけられるようになったことなどに触れて巨視的形態のレベルにおいて'のみ'，ケーラーが同型性をみとめるといっていることには，すこし違和を覚える。このことには，後で触れる機会があると思う。私は，生きている物体，すなわち，'体制'は，ゲシュタルトとして，そのまま知覚される——ディルタイのいう意味連関ををもつ，すなわち，合目的性を内蔵しているものとしての了解 verstehen が，外部存在としての体制についても直接知覚的に行われている，と思うのである。上記の冗舌は，この意味を含めたつもりが，舌足らずのようなので，ここに要約しておく。しかし，認識論的にこれが，問題になり得ることは，否定しない。

ともかく，生物において，体制と心制とは対応的に統一されている。このことは，私が，改めていうまでもなく今日の生物学の常識であろう。地球上に，約100万種の動物と，約30万種の植物（細菌も含む）があるといわれるが，植物はいわゆる自養性（独立栄養）生物で，之に対し動物は，植物の存在をまって，すなわち植物を摂取して，存在し得る他養性（従属栄養）生物であることは，衆知の通りである。植物は，当面の問題と縁薄いので，除外視して，動物をみると，この分類が，Cuvier（まだ天災地変説に立っていたという），Leuckart を経て，今日では，進化論的立場に立つところのいわゆる系統分類を中心とし行なわれていることは，教科書の示すとおりである。動物分類は体制と心制との二面が，渾然一体となって存在する個個の動物を手がかりとして，i) 形態的特徴，ii) 既知群との対比（いわゆる同定 identification），iii) 群内での相互類縁関係の決定などの操作をして，iv) 学名を決定するのが，常道であるが，この各項についても，研究方法，技術の進歩につれ（例えば，顕微鏡→電子顕微鏡；発生学（胎生学）→実験発生学，実験遺伝学（遺伝学自身が，近頃は，DNA, RNA などを中心とするようになった)），種々多様な知見をうみ，群生活の様相（生態学），下部機構の解明（次第に深い水準への分析が可能になり，今日では，生物物理学といわれる水準にまで入り込んでいる。その中に，素粒子生物学などへ達しないとも限らない。私たちの身体を毎秒すくなくとも100兆個のニュートリノ粒子が縦横無尽に穿通している，しかもこれだけでは，測定可能な生理学的効果をもたないなどきかされると，素粒子は，人間がつくった概念的構成物で，構造不明のため構造をもたない(?)点的粒子とされていると承知していても，他方で，質量スペクトルで質量0から2600 m（mは電子の質量）などときくと，色々な空想の浮ぶを禁じ得ない。

なお，筆が逸れた序でに附加すれば，昨年私が最終講義(?)—講演(?)—した時には，人の心のはたらき（心制）も，進化的秩序づけをもち，同様に進化的秩序をもつ'体制'とともに，私たちを規定しているから，これを知っていて，臨床面（教育面）で，クライエントを取扱う場合には，個人としての臨床家のちえで，この関係に矛盾しないようにし，対手の行動機構をうまく総合的に理解し，操作する場合にも利用する必要性のあることを，粗雑に，私の主観的見解として述べたにとどまり，特に細部にわたる検証には触れなかった。今回，このような形で公刊されることになったので，すこしは，証拠力をもたせなければと思って，改訂にとりかかった。ヒトが，心制上も，進化的秩序をもっているとの確信はゆるがないが，その証拠づけは，大脳生理学，脳生化学を中心として，発生学などとも密に関連せざるを得ず，分子生物学（生物物理学）から，いつの間にか，極微の素粒子の世界にまで迷い込んでしまった。ケーラーの同型性論が30年近くも前に提出されていて，その証明の仕方はともかく，主張には，私も同感なことは上述したところであるが，私のは，これを進化論という概念に内包される事実の系列を以て証拠づけ，飜って，'ヒト'から'人'（常識人，こじつけると実存哲学の'ひと' Man（世俗人?）ぐらいに当るらしい），できたら'人間'（実存哲学をまた引合いに出すと，自覚存在 Existenz に当るらしい）へも，すこし触れて，臨床心理学の現況に照らして，'人のちえ'の位置づけを試みたいと思っただけであった。

私は,心理学は,生物科学の一つであると思っているし,私の場合,心理学から精神医学へ移ったのは,回顧すると,極めて自然で,ヒトと人間の中間的位置に位する‘人’の立場が,私に相応しく,40年間,それ程ひどい‘不安’に陥らず,‘決断投企’して,人間としての自覚的原本的存在へ‘飛躍’する必要も認めなかったようである。ところが,自分の‘人’Manとしてへの反省—この原稿を公刊に付するという自己批判の機を与えられて,進化論の根拠はどうなっているか,ヒトと人との関係は,などと詮議しはじめると,今までの無反省(無自覚)と無知で済ませてきた懶怠の罪が,見事に曝露されてきて,与えられた1ヶ月の時間では,不眠不休でも追付かないことになった。第一に,この動物の分類にしても,進化論的系統分類だけでは,充分ではないようだし,オパーリンの生命の起源仮説までは,溯らないにしても,どうやらATP(アデノシン,三リンサン)あたりから,はっきり生命現象過程がはじまったらしいと一応区切りをつけ,ここからヒトの心制まで,跡付けてみよう,($ATP+H_2O=ADP+H_3PO_4$ の自由エネルギーが,pH中性の場合約12000 cal/Mだというようなやり方で)と,とんだ野心を出したのはいいが,これは,ただ既に知られた事柄を,専門的訓練も経験もない私が,それこそ,のりと鋏の仕事で,構造と構造間の実験式として羅列するだけで,好奇心の自己満足には役立っても,専門家からみたら,コジツケの積重ね,それこそ,鼻糞まるめた万金丹式で,今の御時世では,大道での商品にもならないと気付いた時には,持時間をあらかた使い果たしていたのであった。これは,やはり,自分の経験を無雑作に離れて,ただ,自分の知的好奇心にかられてしまったとが(咎)のせいで,これでは,学生諸君に臨床人としてのちえを説く資格を自から放棄したのと同様だと自戒を新たにした次第であった。この自戒を強く銘じておいて,以下の記載は,憶断と解されるのを覚悟で,簡潔に進めることにする。

生物のすべてを通じて,体制と心制とは相互対応的になっていて,一体化して生命態を顕現している。そうして,生物学の示すように,この各生物種の体制,心制を,進化という統制原理で解釈して,配列し秩序づけてみると,かなり工合よく体系化し得る。この解釈は,進化の系列において最も進化したと生物学的に措定されるヒトHomo sapiensにおいても,該当する。したがって,ヒトの体制はもちろん,これと対応し一体をなす心制も進化的秩序を内蔵した力動系とみることがゆるされる。従来,人の身体が,進化的にでき上っていることには,たいていの人が疑をもたなかったようだが,ことが,心制に及ぶと,そうはいかない。哲学史,思想史,神学史,宗教史などの示すように,‘人間’の問題は‘ヒト’とは全く次元を異にする価値問題として展回されてくる論理をもつので,これは前にも触れたことである。心理学的世界は,生物としてのヒトと環境(自然ならびに社会)との接点の軌道体系として価値関係を通じ形成されてくる。(狩野陽:“心理学の世界について”思想:391号参照。これは,10年前の叙述だが,簡潔に経験的価値系の様相を尽した見事な描写である。私は,今日においてもこれに附加すべき何ものももたない。)人間が価値そのものの源泉であることは,心理学を生物学の中に含ませて考えている私の立場からも異議はない。もともと生命は,したがって生命態たる生物の各々は,それぞれの価値をもつ,生命とはそのようなものとして,常識にも映ずるのである。シュヴァイツァーの‘生への畏敬’は,彼の献身的実行を通じて,世界全体に,新しい価値を刻み込んで逝ったが,私の子どもの頃,隣りにいた才田利兵衛さんというお百姓さんは,越中生れの篤農家で,いつも‘南無阿弥陀仏’と小声で唱名しながら,トンボなどをとる私たちを軽くいましめ,自分も,無駄な殺生はすこしもせずに,80余歳まで,謙虚に,しかも,まめまめしく働らいていたことを想起する。利兵衛さんのはたらき(心)は,すくなくとも,私の心制の裡に,valueといえる印刻を残して行ったことは間違いない。その上,利兵衛さんは多くの子ども,孫を残し,中には年に1回ながら,私と‘交通関係’の人もいる。

私は,ヒトの心制を特徴づけるものを,**自我意識性**と**社会性意識**との二つにしぼって考えることにしている。ヒト以下の動物と次元を異にすると昔から見做されて,喧しい論議を生んだのは,ヒトが,自分の心が自分に分かるということからはじまるといえよう。次元を異にするものを,一つにするとの認識論的異議は,不問に付すことにして,生物を通じてヒトに達した段階で,生命が自分自身に気をつけはじめた,prudentになりはじめたと常識的に考えて,何も不思議はないであろう。自我は,生物が各々個体として統一態を示しているその生活作用の中心点とすこしも異らない性質のものである。この意味で,**自我はヒトのはたらき(心制)を統合する中心点である**。だから,自我を探してゆくと,だんだん内包がぼやけて点的存在となる。よく知りもしない癖にと叱られるのを覚悟でいえば,素粒子のようなものに似ている気がしてくる。**意識は**,この中心的統合点たる**自我が自から能動的に使用し得る心制の範囲である**。生命態は,自からを環境との関係の裡に展回してゆく性質を具有している。ヒトにおいて,この展回のし方,あり方が,能動

性を飛躍的に増し，現在の科学では，十分な整理が難かしい段階にまで達したが，それでも，社会心理学的研究は，すこしづつ人としての行動の可能的条件を整理づけることに，歩をすすめている。意識を支える体制的な仕組みは，最近の大脳生理学によって，40年前に較べると段違いに明らかになってきた。脳固定装置にはじまり，脳波の発見，脳波検出記録装置，分析装置，微小電極などエレクトロニックスの進歩を中心とした一連の実験手法の精密化がもたらした成果である。構造体としては，新皮質，大脳辺縁系，視床，視床下部，脳幹網様体などが数えられる。'新皮質は視床下部による持続的な賦活(この基底にホメオスタシス自動調節があるらしい）によって基本的な活動水準（素朴な意識，必然性の目ざめ）が保たれ，その上に網様体から賦活される活動の加重（明敏な意識，選択性の目ざめ）がある'というのが時実教授の概括で，これは，上記の体制的構造間の複雑ながら整然とした進化的秩序に従って機能するのである。大脳生理学の現在の知見を，専門家でもない私が，ここに改めて披露するのは愚かしいことであろう。既に出版された専門書としても，日本語のものには，本川弘一教授の「大脳生理学」及び時実利彦教授の「脳の生理学」があり，アメリカからは，Handbook of Physiology の最初の3巻がこれに当てられている。手近かな啓蒙書には，時実教授「脳の話」（岩波新書）がある。試みに，「脳の話」の目次から拾ってみると，感覚する脳（9）；姿勢と運動を作る脳（10）；知り，喜び，意欲する脳（11）；言葉をしゃべる脳（12）；本能をうみだす脳（15）；怒る脳（16）；記憶し，学習する脳（18）；眠り，夢みる脳（19）；行動を操る脳（21）などの項目がみられる。この項目叙述に使われている概念は，すべて'心制'に関する概念で，私たち生きている'人'にとっては，昔から自分の意識状態または意識作用として，直接的に，内的直覚で，'分かる'（ur-teilen 原初分割される）経験なのである。この直接経験と称せられ，内的な時間形式の流れとして私たちに知られる'心制'のはたらき方が，客観的に，すなわち，外部から空間時間の二形式でとらえられ，カントのいわゆる悟性の範疇の適用で認識が行われるやり方で，体制のはたらきとして叙述されているわけである。このように，いわゆる意識心理学において，内省を通じてとらえられる心的現象——私の'心制'——が，客観的認識を通じてとらえられる'体制'の言葉で叙述され得るのであり，この点においては，ヒトの心制も，ヒトの体制と照応した秩序ではたらいているのである。この点では，ヒトも他の動物と何等変ったことはないのである。ヒトもサルもクジラもイヌもともに進化したそれぞれの段階でのそれぞれの生命態の特徴を，相即不離の統一態として，そうして，'はたらき'と'物的布置'という心制・体制二面において現前しているのであって，この点では，ヒトの心制も，進化の産物であり，体制とともに進化的秩序を内蔵するのである。大脳生理学や生化学は，ヒトの心制も類人猿や犬や猫などの心制解明と同様に，体制を手がかりとして検証をすすめる手つづきで，解明していこうとするのである。ただ，ヒトが，'人'または，'人間'と名が変わると，生命の自覚現象が出てきて，'自我意識'とか'意識'とよばれる内面的認識が生じてき，しかも，この方が，生々しく，自己そのもの，'Cogito ergo sum' 'Respondeo, ergo sum' の源として'常識的'にも感ぜられるので，厄介になってくる。自然科学的充足理由(因果律，S-R 方式の本質）の確実さは疑えない（カント），しかも'体験'，'直接的内面的直観'の確実性も疑えない（'常識'；精錬化されたかたちで，ディルタイ，ジェームス W. James，ベルグソン，シェーレル M. Scheler，ハイデツゲルなど，私がちょっと噛ってみたいわゆる生の哲学者がいる。ショーペンハウエルは，自から'生の哲学'と称したらしいし，ニーチェなどもこれに入れられるだろう。極論すれば，ほとんどの哲学体系は，この事実を基礎，起源として成立っているようだし，今や時代遅れとされ多少骨董品扱いされがちな意識心理学も，この事実の上に立っている）疑えない二つの事柄が，相剋すると，ろくなことはでてこない。唯心論と唯物論；創造説と地動説；創造説と進化説など，思い付くままに拾い上げても，議論沸騰はすさまじい。これが，言論の場に限られている中は，せいぜい罵倒軽蔑そして欲求不満（このフラストレーション解消は，臨床心理学の手に負えるかどうか?）に終ってすむかも知れないが，宗教裁判の結果，はりつけにされたり，火炙りにされてはかなわない。体制が灰燼に帰しては，如何に高等な心制(価値）も無になってしまう。残るのは，そのヒトの心が，体制の支持により文章化したり怒号したりした名残りのゲシュタルトのみである。そこで，ケーラーの同型性論などが，妥協の試みとして提出され，私も進化論の内包するところを，後生大事にしまっておいた仏壇の奥から，ホコリをはらって，持出してきたのである。私にとっては，先祖伝来の宝物であるが，他人様には，かびの生えた鰯の頭かもしれない。しかし，私も，この宝物を持出して，一切萬事を呪術で解決しようというほど'向うみず'(not fore-seeing—improvident—imprudent）ではないつもりでいる。ことは，臨床心理学，すなわち適応異常という生命のいとなみの消極面，否定面に関するからであり，私の40年の経験（体験）は，大体この範囲にと

どまり，これ以上についても，以下についても，ただ文字を通じての常識的，断片的，恣意的知的好奇に委ねておいたからである。この点については，結びの方でまた取上げることにして，再び大脳の方へ話を戻そう。

時実教授に，お断りしないで，勝手に「脳の話」から，心制に特にかかわり合いの深い項目を，先きに取り上げてみたが，この書で特に体制的構造を主にして説明しているのは，(3) 脳の発達，(4) 脳の構造，(5) ネウロン，(8) 大脳皮質の分業体制，(13) 利き手，利き脳，(14) 大脳辺縁系，(17) 内臓と内分泌を統御する脳，(20) 意識を支える仕組み，(22) 脳を支える物質代謝 などであり，最後に，(23) として，‘人間を操る脳’で全般的概括を試み，“人間行動の尊厳は，新皮質の健全な働きによって保証されており，人間性の本質は，新皮質で営まれる精緻な神経活動によって具現されている。いうなれば，脳が人間のすべてであり，新皮質のすべてが人間性の根元である”，との立場で，現在の大脳生理学によって解明された心制の機序を総括的に要約されているのである。非常に明確な断定であり，私も共鳴の大拍手を送る一人である。否，生物学者の大部分は，これを自明なことと前提して，それぞれの専門領域の開発に励んでいるに相違ない。

すでに語ったように，40年前に，独り合点で心理学頼むに足らずときめ込んで，医学に逃げ込んだ私は，私の好みに合うまま，自分の基本的立場を，漫然と生物学的進化論において今日まで過して来た。実際に，大した矛盾を感ぜず，従って，改めて自分の見地を反省しなおすことの必要性も感じなかった。自分ひとりでそう思っている間は，自分で矛盾を感じないかぎり特に根拠——充足理由——を問うことをしないのが，生命の——心制のあり方のようである。矛盾を契機として，弁証法的発展も行なわれるのである。退官に際して反省することは，私の立場に対する自己批判を怠ったことが，研究者としては，また狭義の臨床家としては，大した支障を齎らさなかったと思えるが，積極的な教育者——私は，とにもかくにも教官であるには違いない——として，ことに教育学部教官としては，不充分であり，したがって不親切であったということである。私も，1927年頃から日本でも胎動をはじめ，やがて，法政大学児童研究所（1929年開所），「岩波教育科学講座，教育科学研究」（後者は，講座購読者へのサービス月報誌——(1931. 6月～1933. 8月全20巻20冊），岩波月刊誌「教育」(1933～1944. 3. 12巻第3号で休刊）などの公刊，教育科学研究会（会長城戸幡太郎，幹事長留岡清男）(1937. 5）の結成として具体化し，日本全国の教育界にコントのいわゆる実証科学的精神を叩き込み，生活の現実に即しながら革新的で新鮮な影響を与えた城戸（北大教育学部創設学部長1957停年退官）留岡（北大教育学部教授，1962年停年退官）を中心とした教育科学運動に，この両先輩の驥尾に附して参加したこともあり，教育の対象が，歴史的・社会的・心理的に規定される人間であることを，まんざら知らなかったわけではないし，講義でも教育を考える時，歴史的条件や社会的条件に規定されない個人心理はあり得ない，などと一人前の口は利いていたのであるが，今回，自分の立場を吟味し，自分の‘ちえ’の及ぶ範囲を検討し直してみると，‘ヒト’はかなりの充足理由を帯びて出て来るし，‘人’も，まあまあの線で，私の常識概念の領域内に入れ得るようだが，‘人間’となるとなかなかそうは行かないことに，今さらの如く気付いたのである。

ヒトをして人間たらしめる特徴的心制が，時実教授の明快な論断の如く，進化的秩序をもつ体制に呼応してはたらいていることに対する信念は揺るがないが，信念だけでは，裏をかえせば，不安に連なり，不安解消のため，何か依拠する支持（ゲシュタルト）を求めようとすると，手当り次第，眼につくものだけで形体化しよう（プレグナンツの傾向）ということになり，自分の心制のあり方としては，一応まとまり，その中には，ゲシュタルト心理学の主張するように，よい形（Faktor der guten Gestalt)，なめらかな経過（F. des glatten Verlaufs)，もう洩れ残りはないはず（Restfaktor)，共同運命感（F. des gemeinsamen Schicksals)，客観的だ（F. der objektiven Einstellung)，自分の経験にも合う（F. der Erfahrung）などと安心していると，あにはからんや，ただ近接の要因（F. der Nähe)，類同の要因（F. der Gleichheit)，内鎖の要因（F. der Geschlossenheit）が支配してもたらされたゲシュタルトだったりする。

一度形体化されたものは，物質にせよ（慣性または惰性といわれる)，生命態の体制にせよ（広義のホメオスタシス homeostasis 恒常性。これは，生物としてのヒトにおいても，細胞のレベル，器官のレベル，各器官系のレベル，体内の内部環境全体のレベル——これが，本来の狭義のホメオスタシス。これは，Claude Bernard にはじまった内部媒質の固定性 fixité の概念をキャノン W. B. Cannon (1932）が実証発展させたもので，キャノンは，交感神経—副腎髄質系の自動調節活動を，痛み，飢え，怒りなど情動反応と関連せしめた動物実験で検証した上で，生命の一般的原理としてホメオスタシスと命名提唱したのである。このキャノンの体内部環境の自律的恒常維持性が狭義のホメオスタシスである——さらに，脳維持代謝のレベルなど，進化的体制複雑化の一定水準（準

位）ごとにみられる特定範囲内での状態保守の傾向），さらに象徴とか意味とか価値の形体化としてのことば（概念）にせよ，形体としてのまとまりを失わないようにとの求心力を具有していると思われる。

先きに述べた原初分割 urteilen は，環境と主体との関係裡に，環境と主体とが未だ分離しない渾沌の裡から，いわゆる刺戟条件となるものを弁別選択的に受容摂取し，自己を体制化するとともに，環境をも対象化してゆく機能的意味をもつと考えられる（ノエシス—ノエマ noêsis—noêma）。各個の個体として存在する各動物の環境 Umwelt は，その動物の知覚界と作用界との総体である（Uexküll）との見解を，私の流儀で解すると，ヒトの環境も，ヒトが受容し操作し得る限りで自らを構成すると同時に他界を構成するいとなみの裡に措定されるもので，動物が，刺戟—反応関係の系を通じて自己の環境を内外二面にわたる生活環境としているのと同じく，ヒトといわれる各人の世界も，生物進化の段階，すなわち生命態のあり方においては，基本的に同様であり，生命の自己覚知による自我意識の発現は，同時に他我認識の発見をもたらし，他我認識の分節化は，自我意識の分節化と対応しつつ対象界の拡大充実を具体化し，この裡で現実界を展開しているといえよう。ヒトが，'人間'といわれると，生命が自らを直接にとらえる意識作用が，強調され，この中心点たる自我も強調される。強調されるということは，生命態たる個人の生の本質として自覚されるからである。

この自我意識に具有な生命価値様相は，自らを自他に知らせる体制的手がかりとして，ことば，身振り，文字をつくり出した。表出は，これらの手がかりに支持されて，表現となる。'人間の精神'（最高次に進化した生命態と私は考える）も，支持態としてのまとまりなしには，はたらきを示さない。ことば，身振り，文字は，個体的存在たる生命態が，自己表現の手がかりとすると共に他への効果を通じて，自他の交通をうむ支持者となる。まとまりとしての形体は，分節に基づけられて（Meinong）いることが知られるが，分節は形体としての全体性との関係として，はじめて知られる。ここでも，まとまりを通じて，基をなすもののはたらき（意味）方が知られるので，これらは，ゲシュタルト心理学の強調するところである。形体化の要因は，先きに触れたように，全体との関係における分節の意味をもつだけで，もともと統一性，活動性，目的性を本質として具有する生命態の因果説明には役立たない。生命態の形体化は，合目的的統一活動の'結果'を通じて，その基づけとなった分節との関係が，'了解'されるのである。分節の意味は，結果から溯及的に，すなわちこの結果の全体性の認識を待って，はじめて'判明する'のである。

精神のいとなみは，特に創造的，生産的といわれる。**精神は，上記のように，ヒトの自我意識性と，札会性意識**——これは，まだ触れていないが，後述のようにヒトの心制を進化的に特徴づけるものである——**とを特に強調したもので，いわば，ヒトの生命価値そのものともいえよう**。精神は'はたらく価値'であり，100%に近い純度をもつ醇乎たる'意味の体制化'でもある。精神は，いわば，ヒトのエキス extract である。精神は，スピリット spirit といわれ，'気'といわれるが，これが，'ヒトの呼吸'に関して出た語であることは，誰でも知っているであろう。'いき'は，'生'であり，'息'・'気息'でもある。息が，心の上に自があるかたちなのもおもしろい。Psukhe, Psyche も，'気息'から出て，生命の原理となっている。プシュケが，その美しさ故にエロスに愛され，美しきが故に嫉妬迫害をうけ，エロスにも一時棄てられた後，再び結ばれ，不死をゼウスから与えられるにいたった希臘神話は，ヒトが'人'として，または'人間'として存在するかぎりいつまでも新鮮さを失わない。いき（呼吸）が絶えては，精神もなくなる。'いき'が，身体からはなれて霊魂となり，浮世（憂世）とは，全く次元を異にした別世界に行くと思うのは，いくら何でも古すぎる。プシュケが不死なら，私たちヒト属のうつしみ（現身）に宿り，アフロディテ（ヴイナス）に嫉まれるほどの美しさを現わさなければならない。美の'はたらき'も，構造化（体制化）されなければ，あるのやら，ないのやら分別はつかないであろう。プシュケは残念かもしれないが，天上から地に降りて，もと（本源）の呼吸として，ヒトの生命を支えねばならない。いき(息)の出入りに，うき世の塵が混じるのも，やむを得ない仕儀なのである。

話題が横道にそれたが，精神について，私がここで問題としたのは，

人間精神は，価値または，意味自体であって，そのはたらきは，人間の直接的，自覚的明証性をもって，個人としての私たちに体験され捕捉し得るとしても，その体験自体の具体的進展にも，またその表現にも，思考，身振り，ことば，文字など，何かしら構造をもち体制とよび得るようなまとまりが必要であること，したがって，この意味をあらわす表現関係は，生物としてのヒトのはたらきが，体制的構造間の関係を通じてのみ認められるのと同様であること，である。想像 imagination とか，構想（力）Einbildung (skraft) とか，象徴 symbol などに含まれて何か形体的まとまりを示す'象'，'像'，'想'

などの言葉にみられる含意は示唆的である。これは，すでに前にのべたように，単に時間形式だけでは，はたらき自体の進行や表出を支持する力に不足があり，空間形式との関係が，外部的客観的知覚においてのみでなく，内的直覚の分節，分化にも必要なことを示すといえよう。すでに，項と項との関係が，相互的であれば，これは一つの総合判断であり，ここにみられる関係は，高次のものである（Meinong）との指摘は，進化が問題解決の仕方の高次化をいみすることと並んで，**操作はいつでも一次元低い項同志の相互関係を利用するのが，当然である**と考えしむるものがあるのである。ここに，‘人’の適応障害を，‘ヒト’の体制—心制機序についての知見に即して操作することを正当化する根拠があり，事実もこれを証すると私は思うのである。

この体制間の相互関係を通じて，より高次の対象を解明するやり方は，高次の対象の認識（全体性としてのゲシュタルトの捕捉）が既に成立している時は，全体と分節との相互関係及びその分節間の相互作用の分析（より正しくは，分節）的研究となる（例えば，個々のゲシュタルト成立の要因の研究。レヴインの生活空間なる構想（construct）や，この考に基づくパーソナリティ構造の分節的緊張関係の構築——レヴィンの rigidity の考は，この分節の間の関係を精薄につき検証したところから生じている——の実験的，操作的研究にみられる）。

生物界は，個々の生物として，いわゆる分割を許さぬ個体 in-dividum，不可分割的存在 a-tom-on として，すなわち，紛れようもなく私たちの眼に興奮を強要し，見止め（認め）易い prägnant な図がらとして，われわれの眼前に生きているのである。ヒトは，約100万年前から，これらの生物を，自分の生命維持と発展のため色々なかたちで利用してきた。植物の利用には，四肢のみで足りたかも知れないが，体力に於て自分より以上のものに勝つためには，道具を必要とした。化石人類を通じて分っている最古の道具は石器である。人の対外運動態を特徴づける‘はたらき’の主要なものに，二本の下肢で直立歩行し手や腕の運動度，把握力において自由性が非常に増大しているということがあるが，ヒトの体制も，これに対応してできている。大脳の発達も，直立歩行やこれにともなう手腕運動の自由性の増大が原因であるかの如く説かれることがあるが，これも生命態たる生物が，結果的にヒトにまで進化してしまった事実を，あとから分節的に解釈した時の一つの可能的見解を意味するだけで，はたらき（地上生活や直立歩行）が先きか，体制変化（大脳発達，骨盤，脊柱等の変化）が先きかを，因果的に論証はできないであろう。哲学的用語として用いられるノエシス——ノエマ関係のようなものを，いつも，はたらき（心制）と構造（体制）との関係として，考慮しておくことが，どうやら常識にかなうのである。だから，進化したゲシュタルトとして生じたヒトの分節的要因としては，当時のヒトの Umwelt の考察が，大切である。オーストラロピテクス類の出現した頃の環境状況を，できるだけ真実に近付き得るように各方面から解明してみることから話ははじめらるべきなのである。ゲシュタルト心理学において，地と図との関係，ゲシュタルト要因などを，解明して行くのと共通的事情にあるといえるのである。

進化は，いうまでもなく長年月を要し，これを実験的操作に持込むことは（ショージョーバエなどで，多少近似的試みがあるが）もちろんのこと，進化過程の直接的日常観察記録すらえられないのである。どうしても，化石人類学，化石生物学，地質学その他の資料と，現存の生物学的所見とが，中心資料となり，この総合からの蓋然的推論より得られないはずのものである。オパーリン説が，かりに，実験室内で確認され，DNA や RNA をめぐって生命蛋白質の合成に成功したとしても，ヒトの生命態はおろか，アメーバの生命態を実験的につくり得る日を，それらの成功を基にして，相当程度の確率をもって予言し得るか否かは疑わしい。各個生物という高次の全体的ゲシュタルトの成立とその存在形態の確認を出発点とし，これから逆に，仮説検証で，分節関係の解析を行なわねばならず，科学的心理学における行動理論の方法としてのいわゆる仮説演繹法を適用するにしても，その検証方式をどう設定するかが，なかなか難しいのである。100年前に出現したと推定されるオーストラロピテクス群が，狭義のヒト Homo sapiens とは異なるとして，約3万年前のヒトからはじめても，立論の趣旨を変える必要はない。道具（石器）の使用ができるようになって，ヒトが，環境開発に積極性をもちはじめ，この道具が，旧石器——新石器——金属と進化（?）し，今日のオートメーション機械装置にまでにいたる歴史的跡付けは略々可能であるが，これにより，私たちの環境操作の範囲は一層拡大されたといえよう。

ヒトのことばの起源については，検証しがたい仮説より存しないようだが，初期ないし原始的といわれることばが，通俗的に，情的とか，なまなましさ（生々しさ）とか，という彩りに満ち，何か生命の体当り的な響きをもち，知的な性質が薄いことは，確かなようである。

ことばの進化（?）は，ヒトから人間への進化（?）に対応するともいえそうで，それは，ことばの知的化ともいえよう。自他未分化の環境対応操作から，自他分化への進

展ともいえよう。クレチマーは，民族心理学と児童心理学とを中心として‘心の発達史’（第6章）を彼の「医学的心理学」で描いているが，原始心制や幼少児の心制は，その生ま生ましさ，アニミズムで特徴づけられるとしている。細部の点の相違は別として，ピアジェがアニミズムや自己中心性をもって，幼少期の一時期を特徴づけたことなどとともにこれも今日の常識であろう。ことばは，意味の記号（象徴）であり，意味とは，本来的に生命への関連である。ことばもヒトの環境操作の道具であり，石器が金属に進化し，さらに多様になるにつれ，ことばも次第に分化する。ことばの道具的意味は，石器が，自己保持に特に役立つ道具なのに対し，ヒトの社会性——自他関係に，特に係わる。猫なで声，猫の estrus（oistros—oestrus）をはじめ，すでにヒト以下の動物でも，これは紛れようもなく認められる。ことばの発達は，自他関係の認識の深まりに応ずる。ことばは，ロゴスの形体化であり，ロゴスも形体化されなくては，その理性力，天使的役割を演ずることは不可能であろう。理知の世界は，客観の世界であり，自他の区別の明かな世界である。冷静さを失うとは，自他の区別を無視することで，われを忘れてばりざんぼう（罵詈讒謗）するのは，他をも忘れるからであり，自他の境の消失である。なまなましい原初的生命への里帰りともいえる。里帰りが昂ずると，問答無用とばかり，ことばを捨て，暴力にものをいわせる。人間が，人間性を放棄したのである。キャノンの古典的実験で示されたように，犬や猫でも，恐れ，怒り，飢などの情動は明瞭に認められる。生命のいとなみに直接に関連しているからである。逆に，知的なことばは，ことに文字化されると，往々にして，生命の故里を忘れてしまうことがある。そうすると言葉は，形骸と化する。空虚な言葉とは，生れ故郷たる生命を全く忘れはてた（精神＝魂を失った）単なる形体であって，そこには生命価値とのかかわり合いが消滅し去っているのである。精神も地（ホモ）をはなれては，‘基づけ’を失ない，生命を失なう。人間が言葉を用い，文を草するときには，この注意が必要である。すでに繰返し言及したように，ヒトは生物だから，生命を失えば，ヒトですらなくなる。ヒトに基づけられて，より高次と思われるヒトのエツキス人間は梯子をとられて奈落に顛落するを免れない。幸か不幸か，この奈落の世界は，意味の世界で，岩や石器とは次元を異にするといわれる世界である。顛落しても，石で頭を割る怖れはない。精神病者は，病識を欠くのが普通である。精神医ないし心理臨床家は，ヒトのレベルで，何とかこれをヒトの正常態に引き戻そうと苦労する。価値自体，意味自体であるはずの精神を直接に論議する世界に，臨床心理の水準からみて，生命なき——すくなくとも，生命との関係が疑われる言論の多過ぎるのは，どういうことなのであろうか。私は，私なりに上記のように考えて，（はたらきと構造体制との相即），一定水準ごとに自動的に機能するホメオスタシスが，精神の形体化（体制化）としての言語，文章，言論にもはたらき，自からの進化的生命秩序の基盤をはなれて，——下部構造体制のホメオスタシスを無視して，勇ましくひとり天空をかけ回るのだと推測している。精神のから回りは無駄であり，経験的基盤を無視した，すなわち，生のいとなみにみられる進化的秩序を度外し無視した精神一到主義は不毛であり，時にはノイローゼに結実して，ヒト——人界の私たちの領域に顛落してくるのである。ことに，教育とか世論指導の立場にあるものには，この点への注意がより強く要望される。ケーラーは，先きに引用した‘事実世界における価値の位置づけ’において（p. 2），このような論を展回するのは，ケーラーの academic habits にとっても，‘a reader with academic standards’に対しても，よからぬ趣味，品をおとす仕業だと云っている。私もそう思わぬわけではないが，ことは，私自身の40年間の立場の反省に連なるのであるから，照れ臭さいといって今さら逃げ出すわけには行かない。教育者とか指導者とかは，未知の世界への積極的行進の先頭に立つものである。それは，人間という価値そのもの，子どもという無限の価値可能性を秘めたものに，価値具現の方向に必要なる，そうして，できる限り多方面にわたり偏しない支持（これが，知識，思想，文化，歴史，時事などと概括される人の環境（Umwelt）についての静的，動的情報源となる。個は，この情報を選択的に受容（urteilen）しつつ，自らの環境を設定し，価値を具体化して生きて行く）を与え，自からの展回に資せしめるのである。しかし，生物のあり方の秩序を通じて，進化という立場から，ヒトのはたらきも，体制に対応して知られることを学び，カント，リップス Theodor Lipps，ブレンタノ Franz Brentano，マイノング Alexius Meinang などに教えられながら，生半可に‘他我の認識’問題に手を出して自縄自縛裡に敗退したまま，‘ヒトの心制’を中心とした臨床の実務に逃避して，そのまま居心地よく40年を経過した私の常識をこの機会に反省してみると，‘こと’は自明のようにみえても，必らずしもそうではないことを見出すのである。

進化は，全体的統一性（ゲシュタルト）を保ちながら，各個体として独立して存在しているものが，合目的的に活動しながら生きているとの事実に立脚した概念である。しかも種類だけでも，動物で100万種，植物で30万

種にわけられるほど多種多様なあり方を示している。既に，何回となく繰返し触れたように，生命は，この生物の存在の模様の認識を通じてより以外には，私たちには捕捉できないから，生命の本質は，生物に現象化されている，と認めるより方法はない。だから，統一的全体性（統合性）・個としての独立的活動性・合目的的性が，生物のあり方から抽象されて，生命の本質をなすと考えられ，生物存在の形態学的序列を種々の知見と総合して解釈してみれば，進化論以外に整合的に行ない得る解釈の仕方は見当らないのみならず，この解釈は，単に不毛の解釈ではなくて，非常に生産的な手掛りを与え得ることが，進化論以後の科学その他に及ぼした進化論の影響から溯ってみても，充分に了解でき，今後も，この見地が，問題発見，問題提起に有効であろうと予測されるのである。（**進化論において，価値問題と事実問題とが調和的に統合されていると思う。**ヒトは，個体として，生物であり，人間である。価値は，事実的存在者たる個を通じてより以外には，生産されず，しかも生産された価値は，社会化される。これが，私の基本的立場である。先走ることなるが，ここに附言しておく。）

臨床心理学と人間教育の問題
（精神的存在者—個人）

すでに繰返し論及したように，ヒトと区別される人間は，価値そのものの具体像であり，当為の対象であり，その当為 Sollen の認識は，事実の因果認識 Müssen とは，根本的に次元を異にする。両者は，それぞれ，認識論的にも，論理的にも別な次元で考うべきで，価値認識と自然科学的認識とは，始めから相互に対立するとか，矛盾するとか，整合するとかなど，同一次元で比較検討すべき筋合いのものでない。これが，大体において，カント以来の近代哲学の常識のようである。精神医学ないし臨床心理学の方法を，鋭利な批判的態度で検討した結果を“Allgemeine Psychopathologie”(5 Aufl. 1948)（邦訳：精神病理学総論，上中下三巻，1953～1956）にまとめた精神医学者であり実存哲学者たるヤスペルス K. Jaspers も，カントの認識論は充分に認めているようで，ただ認識の限界の彼方に，個人を含む本体的な包括者をよみ取ろうとしているのである。ヤスペルスは，この著作において，精神病理学の方法として，(イ) 技術的方法（症例報告，統計，実験）と(ロ) 具体的論理的な把握探求方法とを分け，この後者(ロ)に，(1) 個々事実の把握（記述的に患者体験を把握する現象学と患者の自己描写を通ずる主観的現象の把握法）(2) 関連の探究（発生的連関の了解法と外からだけみられる因果連関の探究法）(3) 全体の捕捉，の３つを含めて述べ，精神病理学は一つの理論的秩序づけによるのではなく，多面的に各種の方法論的秩序づけを試みるものとしているが，(ロ)の (3) の全体の捕捉は，(イ)(ロ) の諸方法による多面的な認識において理念としてはたらく全体であり，全体自体はいつまでも理念たるにとどまり，個別を通してゆく道を介してのみ対象となるが，対象自体ではなく，その本体の模型として対象になるのみとするのである。ヤスペルスが，上記の意をも含めて，‘全体は部分の前にある。全体は部分の総計ではなく，それ以上であり，自立的起源であり，ゲシュタルトである。それゆえ全体は諸要素からは捕捉できない’（邦訳，上巻 42 頁）としている点には，私も全面的に同意同感するものである。しかし私が問題としたいのは，彼の人間認識の限界なのである。彼は，この点に関する詳論を，第六部“人間存在の全体”（邦訳下巻 283 頁以下）に於て展回し，“初めの五部門における経験的叙述に六番目の一部門をつけ加えて終りとする。この部門では……哲学的根本問題を熟考する”として，第一項，精神病理学の回顧，第二項　人間の本質に関する疑問を問い，第二項の最後 (ホ)（313 頁以下）に，‘論述を手短かにまとめる’として，自から要約している。その中から摘記すると，Ⅰ．人間存在に関する原則　として，一．人間は動物の一種には止まらず，さりとて純精神的存在でもなく，独得なもので，生きものの系列と天使の系列にあずかり，雙方を占めながら雙方から分離されるもの（後略）　二．人間は我々であるところの包括者，つまり現存在，意識一般，精神——理性と実存である（後略）三．人間は閉じていない可能性であり，未完成であり，完成できない（後略）四．人間は特定の諸現象や行為や思考や象徴をもって自己を現実化し，一方このような限定された現象すべてに対して反対し，彼がみずから確立したものに対して反対する（後略）。五．人間が飛翔するのに抗して，その内部に三つの抵抗がおかれる。ⅰ（人間内部の感情，状態，動因とか，人間を圧倒しようとする所与）　ⅱ（あらゆるものを隠蔽し逆転する不断の過程）ⅲ（空虚な自己逡巡）の三つなどがこれで，人間はこれらの抵抗に向って闘う（後略）の五項目をあげた。次いで，Ⅱ．人間存在を認識する意味と可能性に関する原則．として７項目をあげている。(1) 人間とは何かは，三つの段階で示されるとし，イ．客観的に研究する可能性の方向から，人間は経験的現実として現われる，ロ．包括者の在り方からみると，根源から開明される，ハ．統一という点では，世界の内で求め，挫折しつつ，自覚的になる，を数え，(2) 経験的研究の目的に従うと，人間は自己を成立させる因子，部分，要素，成分，機能，諸力によって理論的に構成される……開明する思考を対象的

認識として扱うならば哲学することは根本的に転倒して，見せかけの科学になってしまう。(3) 我々の認識にとっては存在自体なるものが存しないのに反して，人間は自分自体が確実である。……認識がどこにおいても限界に届いてしまい，そこではそれ以上何ものも捉えられないのに反して，我々自身を知るという認識が限界に届くときには，認識による知と関わりない現実という何ものかが別の根源によって我々にわかるようになるのである。(4) ……人間の即自存在は，既に認識されたものでも，認識中のものでも，認識可能なものの限界において感じとられるように現存しているのである。科学的知識と哲学的開明との境界は対象がこれ以上心理学的実在性として考えられないところにあるのではなくて，超越するための媒介が非対象的なものとなっているところにある。例えば了解心理学と実存開明との境界がそれである。(5) 全体としての人間は決して認識の対象にならない。人間存在の組織的体系などというものはない。……人間に関するあらゆる認識は……必ず一面の現実を示すけれども，人間の全現実を示すことなく，動揺し決定的でない。(6) 人間は常に彼が自らを知り且つ知り得る以上のものであり，他人が知る以上のものである。(7) 人間は眺望不能であり，どんな人間についても窮極的総合判断は不可能である。実践の上から……何が不可避なものかは決定されねばならぬが，これは……今ある状況に即したものであり，……行為に責任を負うものでなければならず，これは知識にのみ充分に根をもつものではない。……したがって「一人一人の精神病者はくみつくせぬもので，謎と結びついているのだという意識を，たとえ見たところ極くありふれた例についても失いたくないものである」とし，つづいて第三項　精神医学と哲学　の考察に進んでいるのである。

ヤスペルスは，上記でも分るように，精神病理学的認識は，多面的に各種の方法により行なわるべきである(この主張自体は何も新しいものではなくビルンバウム K. Birnbaum など多くの人が主張し，日本各地でも実行している）が，各認識方法には，それぞれ限界があり，精神病者の具体的全体像は，唯一つの認識方法ではもちろんのこと，あらゆる認識方法を駆使しても，それからとらえることはできないもので，そこには実存開明という自覚的な過程がはたらき，診断なり治療に当たる人間自身の実存としての自覚の程度段階に依存する。“従って医師対患者の関係の最後のものは実存的交通であり，これはすべての治療を，即ちすべての企画されたものや組織的に作られたものを，凌駕する。(中略) 医師と患者は二人であり，それは運命をともにする伴侶である。医師はただの技術者でも権威でもなくて，実存に対する実存であり，他者とともにある移ろいやすい人間という存在である。もはや窮極の解決は全然ない”（下巻 365 頁）ことになって，私の常識も，否応なしに実存を開明して，‘窮極の解決のない’世界で，おぼつか（覚束）無い探索を試みなければならない仕儀に立到るのである。

私の小論は，もともとこのような難かしい開明を意図したものではなかった。ただ，臨床心理学の臨床において，‘人のちえ’の位置づけを常識的に明らかにし，その支持者として人の心制の進化的秩序を提出すればよい筈であった。しかし，ヤスペルスの精神病理学総論は，1913年の初版以来，精神医学の方法論についての――従って臨床心理学の方法論上も劃期的著作として通ってきている。私が心理学科卒論で苦闘の時（1924）参照したのも，この第3版（1922）であった。第3版は，常識でよく分るように書かれていて，私にはよい整理を与えてくれた。ヤスペルスには恩を受けた想いがある。ただ，当時いささか哲学かぶれしていた私には，ヤスペルスの現象学とフッセルの現象学との相違などに無用の詮索をし貴重な持時間をさいたというほろ苦い想い出が残っている。戦後，第5版の邦訳が出た時，私の教室でも逐次購入し，原著と共に備えて学生諸君の参考に供した。この小論を公表するに当ってはヤスペルスを看過できないので，改めて邦訳で読直してみた。第 4 版の序に，根本知が深まったので，全部新しい形にしたとある通り，実存開明的に統一され，部分的にも精密な記述と構成とがなされて，流石に見事である。しかし実存開明は，なくもがなの感がする。何よりも，尨大な頁数（本文頁数 716，索引を入れると 748 頁，教室のは，第5版と変らないらしいが，第7版 1959 である）になって，第3版（本文頁数 449，索引ともで 458）よりも通読するのに時間もかかる。第3版では，実存の概念は，まだどこにも見当らないが，巻末に近く（S. 439），“よい精神医は，出現してくることがあっても，ごく稀れであることは理の当然である。出現したとしても，ただ単に特定圏内の人達にとってだけのよい精神医なのが普通であって，いわば，この人達だけに，彼がぴったり合っているみたいなのである。誰れにとっても彼れにとってもよい精神医というのは，元来の性質上，あり得ないことである。それにもかかわらず，種々の事情が，精神医を強要して，自分を頼ってやってくる人なら誰れをでも取扱わねばならないと義務づけるのである。このような場合，（今まで縷々述べてきた患者と医師との対人関係という）あの事実が，医師をして，いつまでも謙虚であらしめるに相違ない，”としている文が，むしろ感銘的である。

第3版原著から引用して拙訳したあと，念のため第5版（第7版）をみると，邦訳下巻381頁に当るところが，第3版の原文のままであることを発見した。これでも分る通り第5版は，第3版で簡潔に断言してあることを，さらに説得力ある仕方で布衍したものなのである。そこには，営々として不断の実存開明を数十年にわたってつづけ，人間として高嶺に達し，眼下に展望——実存哲学では眺望というらしい——の広野を見遙るかし，内面的にも豊かな芳香を醇醸させたヤスペルスが，実存哲学者として，高邁なる教育者，指導者として，私たち後輩に向って発する切実な親切心のほとばしりを認め得よう。青年客気はわれながらおそろしい——しかし，心ひそかに頼もしいと感ずるのは何故だろう？——40年前，3-4人の先輩と共にカントを読んで，哲学は——否，認識論は，もう分ったと即断し，ヤスペルスの第3版で，精神医学の方法論も卒業済みと思い上り，（筆のついでに告白すれば，呉秀三先生の「精神病学集要」前篇，第壱冊，序（1916年）の文は，私の臨床の実践及び研究上の指針として40年前から今日まで眷々服膺しているものである）そのまま“隠蔽的な弱々しい迷妄の仕方で”，“平均的非原本的な「ひと」Man”として，臨床に従事し，教育も臨床の延長線上同一水平面に位するものと思込んで，誘われるまま大学教官となり，今日にいたった私なのである。実存開明でないと確信できない‘精神’を対手にすることは，なるべくなら御免蒙りたい方なのである。しかし，教職の位置に，無自覚の故とはいえ，長年に亘って居坐っていた手前，反省を促がされては，逃出すわけには行かない。私はヒトでござる，すこしまけて‘人’でござる，‘人のちえ’で赦るされい，と哀号しても，“精神”の紅騎兵は，容赦すまい。‘人のちえ’も，近代的に飛躍して，‘精神の自己洗脳’へ超越せねばならぬ。竹槍訓練で原爆退治とはすこし時代ばなれし過ぎる，と自己批判する私の瞼裏に，‘日本のいちばん長い日’に従容として愛刀を手にした，阿南さんの温顔が浮び上り，同時にオッペンハイマーの死を悼む湯川博士の随想が響いてくる。ヒトも‘永遠の相の下に’sub specie aeternitatis自分を省察せねばならない。

私の問題は，自己反省にあって，ヤスペルスにしろ誰にしろ，ひとさま（他人様）のことに関わり合うことではない。講義の録音原稿に訂正を加えはじめて，もう2ケ月になろうとしている。改訂草稿提出の約束期限を越えること1ケ月に及んだ。徒らに，過ぎにし日の想いをくちずさむ閑はもう許されまい。自分の立場への批判も，それに伴なう秩序づけも，内省的にはわかっているつもりなので，そのまま書き流せば2-3日で，できるつもりが，どっこいそうは行かない。吾れながら歯痒い。そこで，ヤスペルスを引合いに出したのを機として，彼の論議を藉りながら，早く結着をつけることにしよう。

ヤスペルスの精神病理学総論は，上に略説したように，すぐれて人間的立場（精神を主題とする立場）に立つものである。ヤスペルスにあっては，人間は，あらゆる認識方法をもってしても，単に近づき得るだけにとどまる。人間は認識可能なものの限界において感じとられるように現存しており，科学は超越する思考のための跳板となるだけである。科学的認識の極限において真の無知が経験され，この無知において，特殊な哲学的方法による超越が実現される。この超越に切願するのが哲学であり，この哲学が実存（自覚存在）開明である。開明は，自覚的存在確信（絶対意識）のいとなみ（自己透徹）で，実存の自由，実存的交通，実存の歴史性，実存の限界状況などにおける飛躍，超越を通ずるいわば自己完成のいとなみなのである。だから，歴史的状況にある個人が，充実された自由者として，自己の存在を確信する時に経験されるもので，決して対象化されない性質のいとなみである。ヤスペルスは，哲学的根本命題として，五命題をあげているが（邦訳下巻321～322頁）1. 存在自体はいかなる対象性にも適合せず，また十分には捉えられない云々。 2. 科学は対象性に限られる 云々。 3. 包括者とは（略） 4. 科学は自からの認識によって，超越する思考のための跳板となる（後略） 5. 我々の認識の根本過誤は，哲学的思惟が逆転して或るものに関する対象知と自称するものになってしまうことである……包括者（Umgreifende）を，生起，因果律，実体，力などの範疇を用いて，対象の場合のように機械的に考えることは許されない（後略）とし，つづいて，ホ.“哲学的紛糾”と題して，“もし哲学的に超越するという思想に，対象的思念と規定へ，指示と意志目標へ向けられるといった，あの思想の逆転が起れば，……生に関するところの相反を論ずる思考は恐らく無性格な詭弁と化し，実存開明からは事実に即さぬ自己中心的な心理学的自己観察が生まれ，超越することによって読みとるべき存在暗号は感覚で左右される迷信の対象になり，永遠について哲学的に考え抜くことは，地盤を失って時間と歴史を否定してしまうことになる。どんな場合でも真に超越することは，対象的に意味あるものを去って超越的なものへ飛躍するところにおいて行われ”（後略）と論じ，やがて，“認識の衣をまとった世界観”という題目の下にフロイトに関する有名な鋭い批判を展回しているのである。さらに，“存在論と心理学的構造論”の題下に，ハイデッゲル批判をし，“彼の論旨は具体的で価値あるものであるが，

それでも私はこの（ハイデッゲルの）試みが原理的には哲学的誤謬であると考える。そのわけは，彼が同学の人々を哲学することへ導く代りに，人間存在の全体的輪郭を知ろうとする方へ導くからである。このような考えの所産は，個が歴史的現実的に実存するための補助手段とはならずに，それ自身またもや隠蔽の一手段と化することになる。しかもそれらがきわめて実存に近い文で書かれてあるため，まさに現実の実存を損ね不真面なものとなる危険が一層濃い，”（邦訳書，下巻330～331頁）としている。ハイデッゲルが，‘実存範疇’ Existenzialien をいろいろ展開させて，基礎存在論を組織しようというのが気に入らないのである。これだけ読むとハイデッゲルは，インチキ実存哲学のようにきこえるが，その詮議は別として，ヤスペルスの云わんとするところは，哲学は，科学的認識（これは哲学的根本命題２の示すように対象に向う）ではなくて，（ハイデッゲルの存在論は，一種の対象定立といえるから科学的認識に類する）その限界を超え，理念で導かれて自己の根源を自覚しつつ飛躍し超越するところの——“超越しつつ包括者を知る”——はたらきそのものだというのである。

私は，ヒトの心制（はたらき）が体制との対応を通じて認められることを述べ，ヒトのはたらきが生命そのものを自覚する——意味を自覚する点で‘人’または‘人間’といわれるように進化（?）しても，そのはたらきを特徴づけるといわれる意味関係，価値関係は，やはり体制的な身振り，ことば，文字ならびにその構築物（文章，著作など）を通じてとらえられ，‘わかる’ので，かかる体制的支持（既述のように，これはカントのいわゆる直観の時間形式のみではなく，空間形式に於ても秩序づけられたもので，時空二形式にまたがらないと，ヒトのはたらきはもちろん，‘人間’のはたらきも，それとしては認められず，進行，進化，現象化もできない。これが，生命のはたらく在り方であると私は常識的に思っているのである。既に触れたように，ノエシス——ノエマ的関係である。プシュケの如き絶世にして永久不死なる美女が，私のむくつけき体制に対応して私の裡に宿り，私の行動，行為を通じて，はじめて現前すると思えば，いくら年を重ねてつら（面）の皮が厚くなったにせよ，自から行儀を正し，プシュケに恥じないよう振舞おうという気も自づと起るのである。否，‘気’はもともとプシュケそのものではなかったか?）なしには，精神もただ‘不安’の混沌裡に流れ行くだけでどうしようもなく，かりに意味なり価値なりが自覚されていても，飛躍も超越も自己展回，自己実現もできないように思われるのである。“はじめにロゴスあり”を，このように解するのは私のひがめ（僻目）か，などと思わないこともないが，この40年間どうやらこれで間に合ってきたし，これからも間に合いそうだと思っている。“はじめにロゴスあり”を書いたら，とたんに，青海原へ‘まなざし（視線）’がとんで，日本創世記のおおらかな‘まぐわい（まぐあい，‘目合’）’が，朝日に匂う山桜，霊峰不二とともに泛んできた。正に白昼の夢である。これは，超越の言語たる暗号か，私の学習体系の効果か，それともリビドーのうごめきか，探ってみたい好奇がはたらくが，すこし迂路に過ぎよう。ファウストを気取って独語しているひまもない。私は，もときた道へ戻らねばならぬ。

ヤスペルスの実存開明は，科学的認識が限界に達した際の驚きにはじまる。いまわれわれの科学がもっているあらゆる認識方法を多方面にわたって駆使しても，精神異常（適応障害）者の全体的具体像はとらえられない。個としての，唯一の独立存在としての全形体像は，私たちには，謎以外の何ものでもないというのである。精神病になることが可能であり，必然でありうることは，人間存在自体の謎であり，人を震駭せしむるに足る。犀利敏感なるヤスペルスが，精神医学臨床の現実を媒介として，実存開明にすすみ，自覚的存在として自己の歴史性を確信的に充実しつつ，私たちにも，実存開明へ！絶対的意識へ！汝の不安，汝の無知，汝の良心，汝の愛に目覚めよ，そうして現代の歴史的状況の中で，自己存在の存在性を原本的根源的に反省自覚しつつ危険と冒険の裡に汝の生を充実せよ，形而上学的暗号が，汝の超越の契機として解読されんことを！と喚びかけているように思われる。彼は，たしかに実存哲学者として現代の偉大なる人間の一人なのであろう。しかし，教育科学の教師としては，そのすばらしい頭脳の冴えにもかかわらず，多少の疑念を懐かざるを得ない。何故なら，彼の哲学には，精神病理学についての実証的経験の基礎づけは確かに認められるが，社会科学や歴史科学については，その科学的認識方法の限界まで，はたして迫っているかどうか，私にははっきりしないからである。ヤスペルスにつき，この点を吟味する能力も余裕も，今の私にはない。ヤスペルスを引合いに出したのは，彼の精神病理（したがって臨床心理）学方法論に40年前開眼された弟子の一人として，その因縁の線をたよりに私自身の反省を説明し，臨床心理学の教育科学における位置づけを素描するのが自然でもあり，私の論議に具体化を与える体制的支持として役立つと思ったからにほかならない。すでに触れたように，彼の著の第３版は，40年前の私の頭脳整理に大変に有効であった。ヤスペルスの学恩を忘れるほど高慢ではないつもりでいる。しかし，今回，第５版邦訳を通読

して，深味を加えたヤスペルスの実存哲学的体系の壮厳さにもかかわらず，私の常識は，哲学は，如何なる論述にもimplicitに含まれるはずと教えるから，あまり到るところで実存開明を叫ばれると，すこしこうるさくなる。尤も，認識方法論そのものが，哲学問題であるし，ことに‘人間’としての内面的直覚を，外部認識と関係づけながら答案をつくって行くより以外には，ヒトに関しても，人間に関しても，わかる（ur-teilen）やり方はないので，自から哲学的立場が方法論を彩ることは当然だとも思われる。しかし，それにしても第5版は，実存開明の味つけが，すこし濃厚すぎる。前菜から紅焼鯉魚（これは第2次大戦前ぐらいまでの私の東京での経験的知識である。戦後のことは知らない）まで，それほど濃厚にせずとも，第六部の鯉だけで，とどめをさすようにして貰いたいという虫のよい趣味的註文を，恩師に呈したい気がうごくのである。

どうも，反省は回顧に連なり，回顧は感傷を生む。感傷は，個としての生命が自からのいのちをいとおしむはたらきらしい。私も案外に，詩人たることを発見して，はて，‘ヒト’か，‘人’の立場に安住していたはずなのにと，自からに驚き，自覚的存在として実存開明へ跳躍しようとの衝動が，私のホメオスタシスを揺さぶらないわけではないが，ここは詩を綴るにふさわしい場所ではあるまい。いや，ヤスペルスの実存の味付けが，余りに瀰漫しすぎているなど，文句をつけながら，すでに，ひとりよがりの感傷が，この小論を臭気で耐えがたく彩っているようである。以下なるべく，要約にとどめよう。

ヤスペルスが，実際的に，どれだけ社会科学を‘科学’として消化しつくし，その認識限界において，自己の歴史性を開明したか，私にはわからないし，私の主題には必ずしも必要ではない。ただ，私自身の場合には，状況はきわめて明白である。私の社会科学，歴史学についての学習は，ただ‘ヒト’，または‘人’Manとして，日常生活で生きて行く上での大まかな見当づけに役立つ程度のものにすぎなかった。多くは，岩波新書か，それに毛の生えた程度の解説的啓蒙書を通じてである。定評のある原典は，邦訳のあるものはそれで間に合わせたが，それでも10種になるかどうか怪しい。新聞，雑誌，週刊誌など，“人”並によむが，まあ雑学の程度に終っている。何よりも弱いのは，自分が社会科学的研究を，自分の手でやり，自分なりの苦労を十分に経験していないことである。だから，自分の経験に照らして，批判検討する依りどころをもたないのである。心理学で，アーム・チェーア心理学 Arm-Chair psy.（Scripture, E. W. 1895）とか，パーラー心理学 Parlour psy. といわれるものがある。大磯御殿で葉巻を燻らせながら，軽妙にして時に痛切な諧謔をとばす往年のワンマン首相の脳内に心理学の知識を鱈腹詰め込んだ姿を描いてみれば，当らずと雖も遠からずだろう。（この学派は日日好日などと澄ましている中に Salonblödsinn（Hoche）と化する危険の確率が多い）親切な同情者がいて，そう軽蔑するものじゃない。時には予期しない新問題を発見してくれる，と弁護したりするが，昔からいわれるように，しろうと（素人）の設問には，単刀直入的なことが多い。それこそ科学的認識の限界を何の苦もなく飛越えて，こちらの心肝に迫ることがざらである。もっとも浮世の経験者は，これを舌尖三寸（10 cm 弱か？）で円めてしまう。これを常識ということもある。私が，純心無垢なる新医学士となり，今やかましい無給医局員となった当時，貧民街として有名だった日暮里の某医院の当直医を勤めさせて貰ったことがある。夜間診療が主であった。大ていの病気についての質問には，私の当時の常識で間に合ったが，皮膚病患者の質問には音を上げた。皮膚疾患の診断が，頭に入り難かったからである。院長におそるおそる伺いをたてると，“なあに，それはヒフ病だよ，でなければかぶれかできものと答えればいいんだ，”と言下に快答してくれた。それからは，教えられた通りそれはヒフ病ですよ，と答えると，ちゃんとわかりましたという開明的表現が，顔面表情，点頭運動，時には，なるほどの嘆声を伴って，なだらかな‘交通’が保たれるのである。‘人’の非原本的認識では，同義反復 tautology で間に合う範囲がひろくなる。‘全力を傾けて善処いたす所存でございます’でケリなのだから世話はない。——私の実存開明はどうも不真面目だ，私の体内に開花（昇華）をまつプシュケに，どこか気兼ねせねばならないような引け目でもあるらしい。三猿主義中二猿を暫らく拝借して，閉目鎖耳の短絡反応——原始心制で結着をつけよう。

私は，人間としての実存開明が不足していた。教育者，ことに苟くも教育学を表看板とする大学教官は，教育作用が，価値自身を具体化する個としての人間の心制そのものに関わるのだから，狩野のいわゆる‘心理学的世界について’一応の見（当）識をもつことが前提される。狩野を引合いに出さなくとも，ヘッブ D. O. Hebb : A textbook of psychology, 1958, 121 頁に，Table I. Classes of factors in behavioral development. として，VIにおよぶ諸因子が，実験化との関係を中心として，手際よくまとめられている。因みに附記すれば，狩野論文は，1956年夏に出来上り，1957年1月‘思想’に載った。この小論文の終末近くに“私たちは，この着実な辛抱づよい実験と測定と観察の表示の営みの中に，心理学

的世界が開示してくるのをまちのぞむ”とあり，この待望は，私の宿志とも全面的に一致するので，私は礼を厚うして1956年秋，わが教室の一員として迎え入れ，1960年頃より実験室設営の具体化が狩野を中心としてはじまり，1963年2月27日種々の経緯をへて試運転開始にいたったものである。（この実験室で行われた一部が，この紀要にのるそうだから，就いてみられたい）‘ヒト’または‘人’の立場で安住していた私の後継者として，狩野陽なる‘人間’を見出したことを，教育学部退任に際して，せめてもの償いとなし得たことを心ひそかに倖せに思う。彼は，私が，法文学部教授として最初に講義した‘精神病理学’の最初の聴講者の1人だったらしい。当時，まだ市外だった平岸の札幌市立静療院を借りて，私は学生諸君に患者さんをなるべく多く，なるべく多様な姿において把握して貰うことを意図しながら臨床講義を何回かやった。Gruhle と Kretchmer，そして Eugen Bleuler，Jaspers などが，私の種本だったように記憶する。ここにも，縁の糸を感ずる。暗号として自分の限界状況を読取るのにタイミングを失し，私の人間化は，退官に際して，ようやく始まったばかりである。卒業生諸君には申訳ないと思いながらも，開明の行衛には，私はきわめて楽観的である。ホモ・サピエンスの一員として生を享けた私の裡に，私の体制裡に，プシュケが，私の生あるかぎり，呼吸のつづく限り，私を離れ得ない進化の運命として宿っている確信があるからである。私も，できる限り美しく豊かに行為の世界にはたらきたいと思う。‘行為の世界’と書くと西田哲学が浮んでくる。日本人の一人として，ヤスペルスの実存開明よりは，西田さんの哲学の方が，ともに似たような世界——片方は知的危機の克服，片方は東洋的悟脱と，文化的彩りは異るが——らしいが，なじみ易い。“個物的限定即一般的限定，一般的限定即個物的限定たる弁証法的限定によって限定せられるものとして，自己に於て絶対の他を見，絶対の他に於て自己を見る即ち死することによって生きるといふ所に真の行為的自己の生命といふものがあるのである。”（岩波全書Ⅰ.“哲学の根本問題,”昭和8年版233頁）“我々の行為は無限にイデヤ的なものに向ふと考へられる。それがエロスと考へられるものである。……我々は死によって生きるものとして，即ち自己自身に矛盾するものとして，絶対に無にして自己自身を限定するものを認めることによって……神の言葉を聞くといふことによって，真に生きることができる。そこにアガペというものが考へられる。アガペとは人間が神の方に向上することではなくして，神が人間に向下することである。我々はアガペによって真に生きることができる。……道徳の世界はアガペによって基礎附けられていなければなるまい”（同上，233～235）。こうなると，エロスの妻プシュケも，もう一段と飛躍し，超越聖化（進化？）せねばならない。天空はるかに飛翔し，聖なるものとしての浄めを私たちに頒ってくれることになりそうだ。きよし（清，浄）とは，‘いきよし’（(息)気好し）の略らしい。プシュケの better なはたらきらしい。エロスの妻としてのプシュケを，アガペの妻にまで昇華させるには，共に一度は死ぬ決断が要りそうだ。‘心中’するとは，うまい表現だなどと，ヒト相応の下卑た思案で，いささか逡巡するのは，ヒトくさい未練らしい。逡巡も暗号読解の一契機，独逸人に敗けては末代の恥辱，私も一個の日本男子，先祖伝来の銘刀をたのみにプシュケとともに虚空に身を投じ，アガペとして永遠の浄愛の裡に再生して聖と化そうかどうしようかと決断の瀬戸際に立って，‘実存開明とは絶対無の自己限定なり’と唱えながら，人間学校の門を見上げているところは，どうもプシュケにはみせられぬ姿らしい。

論を軌道に戻そう。私は，教育は，個としての一人一人の心理学的世界の‘開明’なり，‘自己限定’なりが，中心的課題であると確信する。つまり，奥田三郎なり石橋静子なり固有名詞的存在の心制の自覚存在的変革(開明)弁証法的否定即肯定（絶対無の自己限定）が，何らかの契機で，実現されなければならない。これが，価値具体化を具有する私たち人間の進歩であり，それは私なら私という個を通じて果されるのである。この個人の心制の形成の途中（発達段階）や形成後，何らかの事情で生のいとなみ（心制）に障害がみとめられた時が，適応障害で，これは臨床心理学または，広義の特殊教育学の対象となる。この研究方法は，私のいわゆる進化論的立場による——つまり，生物学的方法（心理学も既述の如く，生物科学の中に入るのである）を社会関係との関連に於て，多方面的に駆使し，その認識の極限において，私のいわゆる‘人のちえ’による綜合で，診断治療に当る。換言すれば，教育ないし臨床心理学的な処理方法をその個に対して講じて行くのである。‘人のちえ’も，ヤスペルスのいわゆる個人関係として，包括者と包括者との間の相互ないし実存交通ともいえるかもしれないが，素朴な常識で，‘ヒト’ないし‘人’の立場で，処理が可能であるというのが，私の臨床経験を基にしての結論なのである。だから，ここに，態々実存開明という特異な‘人間’的立場を強調するに及ぶまい——強調してわるいとまではいえないが——といい度いのである。この点には，あとでまた触れるつもりでいる。

これに反して，正常者の教育は，各個別的に存在する

正常者そのものの裡に，無限の価値実現の可能性を具有するが故に，私のいわゆる進化論的立場を破棄する必要は毫末も認めないが，進化論の直接的支持者たる生物学的知見や認識手つづきだけでは，人間の価値的活動を認識し，人間の価値生産を正しく支持し方向ずけるのには不足なため，どうしても，社会科学，歴史学などと常識的に呼ばれる研究を深める必要が生じてくる。私は，ヒトの心制を特徴づけるものとして，自我意識性と社会性意識とを挙げたい。すでに，自我意識には触れたが，社会意識の説明は，ことばの問題と関連してきて，その体制との対応関係について，自我意識の場合よりも未知の点が多いので，‘精神’（人間の心制）につき，一応検討した上で，ヒトにおける体制と心制との対応がここでもみられ，（これには，既に触れた）また，心制に対応する体制の進化的構造も，ある程度客観的知見に基いて推定し得る域に達していることを指摘しようと思ったのである。

三猿中，二猿を借り切って，結着に急ぐためには，今までのようにだらだらして迂余に走り，ことに，社会性意識を忘れてしまった孤独意識裡 solipsism に籠っていてはいけない。 soliloquies が，それでなくとも多過ぎた。説明や弁明をなるべく簡単にして，私の常識哲学による‘人のちえ’を，私の自覚的存在裡に，位置づけるための命題として，列挙してみよう。しかし，生のいとなみは，今の私たちには，始めも終りもただ推定されるだけで（太陽系の成立と消滅）約 50 億年の昔に太陽ができ，約 25 億年前頃，有機物質ができたなどと，種々の証拠から推定されてはいるが，確実な生のはじまりはわからないといえよう。ただ今日では，地球上のあらゆる生物は，太陽において，水素がヘリウムに変る核反応に伴なう質量損失の際に生ずる光と熱に依存して生きている，と考えられている。この依存関係は，ゲシュタルト（全体性，個体的図がら）と分節との関係であり，基づけの関係であり，すでにみた如くいつも全体性（生命の場合には，‘この桜’，‘あの犬’）が先きに認知されてから，それを成立させる分節的要因の解明へすすむのである。この要因の解明が進み，要因間の関係または要因と全体との関係が，S-R 方式によって，一義的に確立すると，ここに因果性の成立が措定されるといえよう。そこまでうまく解明できず，処理できない時にも，試行錯誤をくり返しながら，われわれの生のいとなみに関与するものを，何かしら統一的にとらえようとの活動が行われ，類型学的把握，類縁的分類などを行ないつつ，自分の生活をなるべく有効に拡充していこうとの努力がされるらしい。このような生物の生のいとなみ全体を通覧すると，そこには，既にのべたように，生の本質として措定せざるを得ない特徴が認められる。活動性，統一性，目的性がこれで，これは，生物が個としての全体的統合性を示す有機体であり，自他の接触関係を媒介として活動的に環境を対象化しながら操作するという過程の裡に生を営むが，そこには合目的的といわざるを得ない全体性と部節との機能関係が認められる，というわれわれの日常的経験的事実を土台として抽出し概念化したもので，**いわば生命に関する事実的特徴といえよう**。

私たちの日常経験は，生物として誕生した赤ん坊にはじまる。ヒトの子は，生物として，おそらく3万年（Homo sapiens 出現）の過去をもつ歴史的所産であり，この歴史の裡には，すくなくとも5億年に及ぶ進化の刻印がある。そうして，ヒトにおいては，他動物と異り，生誕の当初から（というより妊娠の成立時からであろうが），社会の手の中に，社会的存在として生まれてくるという特殊性を示している。これは一方ではポルトマン Adolf Portmann が，生理的早産と名付けたヒトの乳児期の（ことに脳の）もつ未熟特性（生後1年半を経て，ようやく親に似た直立歩行，言語能力を示すようになる。他の高等哺乳類では，出生時，すでに弱いながら親に似た体制と機能とを略々備えている）により，他方ではヒトの群居性を特に社会性と称するにいたらしめる具体化された特異な対人関係組織の成立によると思われる。ヒトが，母胎をはなれて，独立存在となっても，乳児としての最初の 18 ケ月間は，通常，母親という赤ん坊とは別な時空的独立存在者を中心として組織化されている社会が，いわば生物学的母胎内環境の代理者として機能し，乳児としての最初の独立生存態を保証すると共に発育成長の場ともなっているのである。ヒトはこのように，社会的存在としてのみ最初の生の営みが確保し得る特異な生物として生まれでる。出生時に，生理的早産といわれる特性の裡に含意される特異な生命態の姿である。しかし，原則的には，他の動物と，生命の本質を異にすると措定する必要はない。前に引用したユクスキュル J. J. Uexküll の Umwelt についての考え方，すなわち，動物が知覚し反応して操作する世界の総体が，それぞれの動物の環境 Umwelt である，との見解を，そのままヒトの世界にも適用して差支ないのである。

すでに，繰返し述べたように，生命のはたらきを特徴づける本質は，合目的的—統合的—活動である。Uexküll も，動物の環境を Umwelt として，上述の如く解しながら，動物の目的追求性は，機械論的に説明できぬと考え，ドリーシュ Hans Driesch も，ウニ卵その他についての実験発生学的研究結果の解釈から調和等能系 harmonisch-

äquipotentielles System の存在を考え，これが生物に独自のものとし，その他卵巣の如き複雑等能系の存在，また人間行動など，生命活動には非機械的因子がはたらくと解し，この自動的，自律因子として，エンテレヒー Entelechie を導入し，これは空間内に存在しなくて，しかも空間に方向づけを行なう因子としてはたらくと考えて，新生気論を唱えた。エンテレヒーは，目的原理に相当するらしい。個体としての生命活動が示す合目的性が，昔から，機械論的説明とは相容れないとする解釈を生み，ドリーシュのエンテレヒーの生みの親であるアリストテレスをはじめ，種々のかたちの生気論とか活力論とか呼ばれる思想を生んできたのである。これらの旧式活力説の誤りは，特殊な力を措定して，この概念で目的的な生活活動を説明しようとすることで，魂とか霊力のごときものの存することを，結局は承認することになり，自然科学的認識と矛盾することに陥るのである。ドリーシュのエンテレヒーは，非空間的な性質となっていて，この難点はさけているが，かかる概念は，証明もできず，否定もできないことになり，新生気論という立場が，科学的生産には何も役に立たず，悪くいうと，独りよがりに堕する危険が多いのである。私のも，一種の活力説の立場らしいが，私は，カント説を常識化したつもりでいるのである。

上述のように，動物の生活する世界は，彼にとってのUmwelt である。個としての各動物は，この中に生まれ，この中で生をいとなみ，やがて生を終えて消えて行くのである。ヒトも，その点では，すこしも変らない。ただ，ヒト以外の動物は，その環界（Umwelt）と交渉し合い，知覚を通じて外界を定立しつつ生のいとなみに最も都合よく（合目的的に）外界条件を操作して行く場合に，進化的に低次であるというそのことに伴って，環境を操作し定位しつつ自分の生を展回するすべての様式において，ヒトに比すると著るしく簡単であり，質的にも限られている点で区別されるのである。しかし，動物でも，個が個として生きているかぎり，そこには生命活動の統一，統合性がみられる。統一には，統一の中心をなすものが，当然に予想される。これが，いわば動物の自我なのである。動物の自我も，ヒトの自我とこの意味では変らない，生活行動の統合的中心なのである。動物が，自分の生活上重大な関係をもつ問題状況（敵との遭遇，飢餓状況，発情期など）に面した時には，その生命個態(心制—体制的有機統合体）は，個として使い得るものを結集して，問題解決に当り，生の均衡を回復する方向に動く。この個として統一されて機能し得る全体制の働らきそのものが，動物の生命内界で，いわば，ヒトの意識界に相当するといえよう。ヒトにおいては，生命が自分自身を感知し得る程度にまで進化し，それに伴ないヒトのUmwelt も，飛躍的に拡大される。人における科学的研究も，自分の環境を最もよく利用し操作しようとする生のいとなみとも考えられる。そうして，今では，物理学的好奇は，素粒子だとか，量子力学だとか，私たちの日常感覚とは，全く次元を異にした環界設定にまで及び，粒子にして波動とか，分ったような分らない極微の世界を確定しようとしているらしい。確定への努力が発見したのは，不確定の原理だったなんていうのは，もうモダン落語のオチになっているかも知れない。極微の世界が，一ミリの一兆分の一という超幽霊（これでは，あし(足)があってもなかなか分るまい）の遊戯の世界にとどまるなら，ノーベル賞で私たちまで何となく肩身の広い気になるぐらいがもうけもので，湯川さんも朝永さんも，米粒にお経を書く人も，大して変らない筈だが，原爆，水爆，いや，私たちの生命の独裁的大親分お天道様と直接に交際されるのだとなると，すこしは丁寧に頭を下げないと済まなくなる。極微の世界は，それこそ，無の世界から私たちを限定し，しかも私たちヒト属中のエリート科学一家によって限定され，私たちのUmwelt として定立されているのである。Cogito ergo sum は認識主体を確立するが，同時に客観界をも確立するのである。ただし，既述の如く，これには，‘こころみのこころみ’，経験の経験——S-R 方式による時空裡に私たちの眼でとらえ得る現象としての証拠が必要なのである。現象としての証拠は，いわば無から，（この無は，虚無ではない，とうてい区別し分割（ur-teilen）し尽し得ない無限的微分界のはずで，いわゆる An Sich であろう。そうして，この An Sich は， Werden で，時の流れ，純粋持続，Élan vital, Élan originel, 価値の泉流であると私は確信する）選択的に弁別することにより，ヒトが取り出して設定するものである。しかし，そこには，先験的形式だの範疇だのという厳格な法が控えていて，法の無視は，簡単に葬り去られてしまう。手品師や魔法使いのように，ヒト眼をごま化すわけには行かない。

臨床心理実験室と保育実験室の必要性

心理の世界は，生物としての主体と環境（人においては，社会的環境が重大になるが，自然界ももちろん環境として有効である）との相互関係の裡に展回されるのだから，形式的な認識論理が具体化する場は，個体内にある。個体には進化の歴史の印刻がある。ヒトの眼は，太陽光線中，わずかに，波長 770 mμ～380 mμ ぐらいの範囲のものしか感受できない仕組みになっている。この仕

組みが，どのようなやり方で無から有をとり出すか，そこには種々の条件が働くだろうが，ヒトの個性も一役買うことに誤りはあるまい。一を聴いて十を知る，のは，ちえのあるやつで，猫に小判は‘分らない’。ur-teilen は，判断でもあり，無から有を定立する統合の働らきでもある。狩野中心の私たちの実験室は，精薄その他の‘心制’を，このような仕組みの動き方を通じて明らかにしようという試みなのである。‘動き’をとらえるには，示標が要る。意識心理学では，ことばが示標として中心であったが，ヒトの世界では，なるべく生物学的示標でやりたい。‘ことば’は，高次な第二，第三信号系で，自由度が高い代償として，内包が一義的に決定できないことが多い。私たちの実験室は，いわば生命のはたらき方を，素裸かにしてつかまえて，Umwelt 定立の経験的条件を明らかにしようとの大胆な試みだ。10年ぐらいやったら，‘人間’界にすむ教育学部の諸先生にも，すこしは分って貰えるかもしれない。啖呵の序でに書いておこう。わが教育学部は，教育学プロパーの研究と指導が主要任務だ。だから，附属幼稚園の如きは認められないと文部省は仰言る。文部当局の頭には，書物があれば，教育学は分るとの古典的（これは修飾語だ。進化的用語では，蒼古的 archaisch，石器時代的）思想が宿っているらしい。すでに書いたことだが，子どもなり，特殊児なりを直接に操作し得る場をもたせないで，特殊教育や児童発達の研究ができるだろうか。発達心理学講座を認めていただいて有難いが，保育実験，臨床教育の場が失われては困る。他の幼稚園なり保育所とタイアップしたらなど，簡単に云われては，ことの性質上納得できない。他所へ行ってやれることは，横断面的調査位のものだ。時々，様子をみに行くのは，ジャーナリスの仕事である。私のこの小論のように，他人様の知見のゴッチャ煮では，かりに食えるにしても，生産的とは申せまい。私の場合は，とにもかくにも臨床経験という聊か曖昧ながら，私なりの依拠がある。明治のはじめや，戦後の混乱期にみられた飜訳的知識の輸入にたよるのは，‘愛国的であれ’という期待される人間像にも反する。個性としての子どもの心制や精薄心制の変革を跡付け得ないで，どこに教育心理は生き得るだろう。‘それは対人関係からくるフラストレーションだ’は，私の‘それはヒフ病です’に似ている。フラストレーションも，皮膚病も，治療的課題なので，治療方式を自から開発するのが，専門家に与えられた任務だろう。実験的操作を自分の手で従断的に継続実試できる場の確保が私の退職後どうなるか，私の懸念するところなのである。

ヒトの世界も，動物の環界と同様の生命的性質をもつ，と考えても，生命が自らを知り，知ることによって設定する世界が，動物の知覚と反応作用により開発された世界とは全く異質のものと昔から考えられてきたのにも無理からぬ点がある。しかし，この場合の異質とは，進化的次元の相違と解すべきもので，この方が，万事を整合的に解釈するのに都合がよい。ヒトの心制を動物の心制と区別させる特徴は，ヒトの生のあり方——体制機序を通じて，多くのものがあげられようが，すでに触れたように，私は，自我意識性の発現と，社会性意識の発現とに，要約して考えることにしている。意識は，元来は，仏教の倶舎論でいう六識の一つ，唯識論でいう八識の一つで，眼，耳などの感覚器官が，色，声などを別々に認識するに対し，対象を対象として総括的にとらえる心の働き（広辞苑）をさす概念で，仏教哲学では，ことに法境に対する知の了別作用を行なうものをさすとされている。色即是空というお馴染みの文句の故里を探ってみたいが，今は，‘視ざる’‘聴かざる’二猿に譲り，東洋的実存開明の幕もおろしたままにせざるを得まい。いまいましいが英語の Consciousness，独語の Bewusstsein の訳語としての使用に係り合わざるを得ない。この訳語としての意識は，一般的に，“現実に体験される一切の経験或は現象”（岩波哲学小辞典）と解されていて，正にこの通りには違いないが，これでは，動物が自分の環界と対応する世界における交渉関係過程そのものであると，私がすこし前に記した動物心制についての描写と，余りにも合致しすぎて，生の自覚的作用という特性が，ぼけている感じがする。これは，哲学辞典は，動物学とは無縁と信じられていたからであろう。動物の心制を人間と同様視するなど，哲学にあるまじきことなのだ。

生命のはたらきは，断えざる問題解決のいとなみといえるものであるが，その解決すべき問題は，内外二面間の交渉関係において生じ，したがって，内面的条件と外面的条件のいずれか，または，両方に，生の安定状態（広義のホメオスタシス）を，みだすような状況が生じた場合が，解決すべき問題状況であり，この問題解決のいとなみが，生のはたらきであり，行動なのである。最も簡単には，S-R 方式となる。Sはホメオスタシスのみだれ，Rはその解消だ。Oなど，入れても入れなくともいい。レヴインの有名な公式 B=f (P.E.) は，上記の関係を巧みに表現した含蓄深い式である。Pは，Personality の略字だが，Pの代りに，どの動物 Animal（Aと略す）を持ってきても，この式は成立つであろう。Umwelt の概念は，E=f (A.B.)（Eは Environment，A は Animal，Bは Behavior）で示し得るであろう。しかし，AとPとでは，進化的次元が異るので，自から E=f (P.B.) は，

E=f (A.B.) とは，隔絶した世界となり，Behavior にしても同様になることは勿論である。ヒトは進化に於て，最高次に達した生物であり，したがって，その主体（心―体制）も，非常に高次化された有機的構成 organization を示し，主体構造は，体制においても，心制においても，高次の準位的構造（この準位ごとに，ホメオスタシスが認められることは既述の如くである）を示すのみならず，部分と，全体としての個体性との間には，既述の基づけ Fundierung (Meinong) の関係が成立していて，統一ある個体として，合目的的に問題解決のいとなみをつづけるようになっている。生命は，その進化の歩みの最高次元において（最高次元とは現在においてであって，あと5万年も経つと，ヒト以上の次元の生命態が出現しないと保証することはできない。スーパー・マンの時代になって，昔は自からホモ・サピエンスと名乗った生半可な野郎がいて，自分の知性をもて余したそうな，など，いわれないとも限らない）自からを知りはじめた。意識の誕生である。自我意識性は，問題解決が困難な時，生命自体の展回が円滑に進行しない状況のもとで，生命の努力性として，わかるものである。平和な時には，自我も意識されることが弱い。自我はのんびりと，肘を枕にまどろんでいる。だから，自我は単に生命態の中心点の意味をもつだけで，自我の範囲や領域やその構造を改めて考察することは無意味である。意識も同様で，詮議すればする程はっきりしなくなる性質なのである。強いていえば，めざめた自我が，スワ一大事と立上った時，眼に入る手勢ぐらいの意味だ。眼に入らないお勝手にも，トイレにも加勢の武者はひしめいている。しかも，受持ちの部署をちゃんとかためながら。改めて名乗るまでもなく私たち各自は，自分の姓名の所有者で，個としての独立生命態である。しかしこの点は，動物でも同様なることは既述の通りで，ただ，ヒトは，問題解決能力に於ても進化し，高次化されて多種多様な道具の使用が可能になったのである。前にみたように，ヒトの道具となったものの最初のものとしては石器が確認されているだけのようだが，当然，樹枝，樹幹も利用されたに違いなかろう。プロメトイス Prometheus(pro＋ménos＝fore－thinker) の火も，燃料なしでは，つづかないからである。しかし，最も決定的な役を買ったのは，‘ことば’という道具が，使えるようになったことではあるまいか。道具使用のはたらきと直立歩行に基づけられた体制的変化（腰に力を入れて道具に味方された腕力を用いられる）と，いずれが先きかは，くり返しみたように，因果的には分らない。体制の変化が起った（新らしいゲシュタルトの生起。この認識が最初）結果から溯って，または，体制のあり方を通じて，部節の関係やはたらきがとらえられるのである。ことばの出現や発達（進化？）も同じように考えるべきで，この基底には，ヒトの初生児の生理的早産性（ボルトマン）として知られるヒトの社会性がある。ヒトにおいて，社会性は，ヒトを人たらしめる sine qua non である。動物生態学ないし動物社会学の教えるところによれば，ことばの原始形体たる叫声その他，いわゆる動物のことばがある。ハワイヤン・ダンスに輪をかけた蜜蜂の振舞いは，身振り言語の代表といえよう。私は詳しいことは調べてないので，断定はできないが，動物のことばが，その種にとっては，大体インターナショナルらしいといえそうだ。英国人が，日本語をマスターするより，英国犬が土佐犬の警戒語や嬌声（これは，猫をもって来た方が，私の経験ではより確かだ）をマスター（？）する方が，よほど手っとり早いといえそうだ。ロンドンから輸入する高貴の犬に，ジエット機内で日本犬が，一生懸命ことばを教えている光景はみられない。ところが，人ではアメリカ留学は，船で行こうなんていう魂胆に，2週間で，せめて会話やエチケットをの想いもふくまれていないとは云切れない。私は，一例の臨床例を持っている。

ともかく，因果は分らないが，ヒトの生命展回に，社会性（対人間同志の函数関係の組織。ここにも，種々の準位がある。ヒトの個体体制の細胞に当るのが，私たち一人一人であることは，悪評高き社会有機体説の中にある。理論的に正しいかどうか，何にしろ既に自白したように，私の社会学は，通俗の域を脱しないので，何ともいえないが，比喩的に使うのは赦されよう。各準位ごとに，これは比喩だが，ホメオスタシス的なものがみられるのも事実らしい）の進化が，決定的重要性をもつことは確からしい。何にしろ，社会の一員として出生して来，18カ月間，社会という胎内で，大切に保育され，生理的に手厚く保護的に扱われて，（だから，余り18カ月内にやかましくしつけを行なうことは自然に反する。一般に‘しつけ’は，納得づくで行なえ，生命の自然的展回の文脈に即して行なえというのが基本になる）その後の生存が保証されるばかりでなく，ヒト（すくなくとも，私はヒトである。もうすこし経つと皆様方の仲間に，人間として belong させていただくことになるかもしれないが，そこまで‘いのち’がもつか知ら？）の心制の秩序的進行やいわゆる精神内容といわれる文・物百般に及ぶ知見，ものの見方，考え方，否ひょっとすると感情の起り方まで，ヒトと社会との接点での交渉，接触的函数関係を通じて規制されるのである。この模様は狩野の‘心理学的世界’の成立であり，彼の描写は鮮かである。ここに介入する因子を6種にわけ，表にまとめて，Hebb が彼の教科書

(121頁)に要領よく示していることも，既述の如くである。私の10数年間の飯のたねだったらしい講義も，このようなヒトの心制のいきさつ（経緯）を中心にしてのことだった。できばえがよくなかったことを悔いてはいるが，これこそ後の祭りというものだろう。いづれにせよ，私たちの持っている精神内容を点検してみると，自分でつくったものなど，まず見当らない。どこで貰ったのか，買ったのか，窃ってきたのか，さえ判明しなくなってはいるが，当初の製作者や持主が，自分以外の人であったことはたしかで，発達とか教育といわれる時間の流れに沿う社会との交渉裡に，いつの間にか，私なら私の心理学的世界の中にとり込まれて，今度は，私のものとして通用するのである。金銭みたいなものかもしれない。(金銭で想出した。ATPが，生命現象全般に亘って通用する通貨であること，体制の進化は，ここを起点としてみられることを，この原稿改訂のため試験勉強した記念に記しておこう。岩波「現代の生物学」2，‘生体とエネルギー’（まえがきi）にあり，また，同書257頁に“前生物が初めてATPの産生と利用の能力を獲得した時点をもって，最初の生物の発生とみなすことは，エネルギー論的には妥当であろう”とある。専門家には，嗤われるにきまっているが，これは，私の実存開明，洗脳の過程だ。恥部も脳味噌も曝け出して，文化大革命に馳せ参じないと，バスにのり遅れる。）このように，個は，対他個との関係裡に，つまり社会の中に生れてき，社会のものを，自分の心制の栄養物として，社会と交渉するいとなみを通じて獲得するより致方ないのだから，生命も自分の進化度に応じた新兵器——兵は忌まねばならぬ，道具といいかえよう，技術革新の最新器具，‘ことば’を，この社会関係を操作する際の主兵器（‘人生は戦いなり’と割り切った方が，筆の運びも早い）として用いることになったようである。（くどいようだが，これは因果的説明として云っているのではない)。ヒトはことばを，すなわち象徴を操りながら，社会に生き，自分の社会を定立してゆく。‘人間さま’として（ヒトより次元が高い)。これを中心として見事に描写したのが，カッシィラーで，彼の‘Essay on Man’は，宮城君により，巧みに訳されている。回想すると，Cassiererにも，随分お世話になった。彼とWindelbandとは，名文家で，読むとリズムにのる。リズムにのるとは，生の流れに調和することだろう。音楽は駄目だが，描写された文のリズムを曲りなりにも味えるのを倖せと思っている。

駄文も，‘おだぶつ’の時となった。尻切れとんぼは，私が急に，卒中になったと思って許してほしい。しかし，結論だけはつけておこう。

ヒトの心制は，内面的にも，はたらきとして察知されるので，科学的論議に，みだれが生じ易い。‘人間’を主とすると，この生のはたらきそのもの（価値）に即して，論議が行なわれがちになるからである。しかし，生命のあり方は，‘はたらき’と‘構造体’——心と体として，われわれに認知される。‘はたらき’のみでは，時間系だけで，純粋持続などというが，こういうためには，対象化され，体制化された何ものかが，つまり空間的認知を何らの形で許すより方法がない。物理学での素粒子の振舞いも，時空の関係式でつかまえるより方法はない。人間の心制（はたらき）も，ことばのような形体（象徴）を支持者として必要とする。すべてを，個体そのものの進代段階を中心として，個としての生命態のゲシュタルト性を，すなおに，つまり私のいう常識的に，承け入れて，ここの姿（心理学的世界）から，社会性の濃化の方向へ行くと，生物(生命態)としてのヒトも，人間らしさを増す。人間育成，指導の学たる教育学は，このヒト→人間の方向に主眼がおかれる。社会科学の認識限界を，多方面から見定めた上（ヤスペルスの臨床心理学—言葉換えの咎め立て無用—の方法論参照のこと），将来への超越，飛躍（実存開明）は，個人の自由，見識を信用してそれに一任すべきである。個人の尊厳，基本的人権の含意は，ここにありそうだ。ハイデツゲルのように，下手に存在を対象化して，具体的に指示するのは，行き過ぎ，自由侵害，人権干渉である。余計なお世話である。ヤスペルスにインチキ実存主義ときめつけられても止むを得まい。私が，教育学教職失格者だったことへの反省自覚は，今度ではっきりしたが，正直のところ教育学部教授としての16年間，どこか不充全，不整合感を覚えていた理由が，ここにあったらしい。偶然にも，私が明確なかたちで，存在形体を学生諸君の将来への指示として提示定立しなかった（つもりでいる）のは，不幸中の幸い，怪我の功名である。

飜って，**適応異常の方は**，‘人間’のレベルでやってわるくはないが，**日常的な‘人’で，ことたりるようだ**。ただ，これもヤスペルスの指摘どおり，あらゆる認識方法を多面的に駆使し，その限界において，‘臨床家のちえ’で，総合しなければ，治療も診断もでて来ない。支持すべき臨床心理学体系の不充分さをすこし強調しすぎた憾みがあるが，私が今日まで，臨床畑を主としてやってこれたのでも分る通り，すこし勉強すれば，実際にはまあ間に合う。‘皮膚病です’ですませるのは，いくら間に合っても（‘実存交通成立’!）すこしひどすぎる。実存開明の方向ぐらいは，私程度の曖昧裡でも，やはり私たちの，そしてクライエントの地づら(field)なのだから，見

定める努力は必要だろう。この場合，問題整理に進化論的見方が，役に立つ。ヒトを――一般的にいえば，高次のものは低次のものに基づけられている(Meinong)――操作しようとすると，ヒトを基づけている仕組みをできるだけよく認識しておく必要がある。実験的に行動学をつくり上げている領域の知見，ゲシュタルトの考え方，社会的知覚の意味，ヘッブの発達要因の函数関係，狩野の心理学的世界，精神医学の体系，台弘君の実験行動学(これが，生化学と結び付いて創見を与えてくれる日を念願している)，精神薬理学の進歩，など，思い付くままに並べたが，これらが私たちの使える支持者として役立つであろう。操作は，低次の部節関係に着眼して，というのが，私の諸君への贈けのつもりである。そんなこと，昔から分り切っている，といわれる方のためには，この古るボケタ進化論以外には何も差し上げられないのが残念である。

進化，進化とお題目的に，護符のように私は使ってきた。本当は，進化の意味をもっと明確にしておくべきだろうが，今回は，失礼するよりしようがなく，ただ，進化とは，問題解決能の高次化をいうと定義するにとどめよう。この高次化が，心制にも体制にも認められるのである。カントは，“或対象の存在が，此対象の概念を前提する時に，この対象は，合目的的と称せられる”といっているが，これは，個としての生物の存在のあり方，それを秩序づけた解釈原理としての進化論に具体化されていることを指摘しておきたい。舌足らずに終ったが，生物を進化論的に整理づけて眺瞰し，ことにヒトの個としてのあり方をこの見地でみると，進化の歩みの中に漸次価値は実現化されんとしていて，ヒトにおいて生命の自己自覚としての意識が派生したようである。ヒト中心の合目的的性の実現，これは衆知の如く，カント哲学においては第一批判で，自然科学的認識が確立され，この因果的自然観を正当化しつつ，第二批判，第三批判で，道徳力，判断力の先験性を確定し，合目的的性で，自然界をも抱括する壮大なる体系を建設した。目的の王国への行進，これがカントの世界像，人間像である。カントばかりでない，ヤスペルスの実存開明，西田さんの行為の世界における絶対無の自己限定をはじめ，ほとんどすべての哲学が，価値実現者としての人間，しかも，いつも完全性へ，理想へと向う努力のいとなみとして，永久に完全の閾には達しないが，しかもその努力の裡に，生き甲斐を見出すものとして，人間を描いていることは，いくら私でも，襟を正すに値する。はじめにロゴスあり，テレオロギーもある。ゲーテのファウストの精神もさりながら，進化の歩みに示される生命の歴史は，私に無限の感銘，カントの無上命令的尊厳を与える。有縁のわが卒業生諸君とともに，私は，ヒトとして，また人として，乏しいちえをしぼり合って，誠実に人間化の道へ歩をすすめたい。

3万年，いな5億年に及ぶ時の流れの裡に，33億現存するヒトビトの仲間から，どうしたえにし（縁）の糸によってか，私は諸君と，あの物置小屋（正にアンクル・トムの小屋を偲ばせる）のような研究室を中心として，会話を交える間柄となった。悪縁であったら，運がわるかったとあきらめてほしい，すこしでも役に立ったら私も有難い。人間疎外などと軽々しく云わないでいただきたい。人間には，すくなくとも sine qua non としてのヒトが基づけをなしている。ヒトは，生命の最高次化した姿である。個として，お互様に小宇宙 mikrokosmos なのである。創世紀に連なる進化の歴史を内に蔵しつつ無限の価値（時）の流動裡に，自からの軌道を描こうではないか。名が残っても残らなくとも，永遠の相の下に sub specie aeternitatis それがどんな意味をもつのだろう。自からのプシュケを余ますところなく開華せしめ，やがて，アガペに浄められ，ニユウトリノとなって，宇宙裡に音なき無限軌道を飛翔しつづけようではないか。

あ と が き （小論の趣旨）

私のエッセイは，個人的な回想のうた(詠歎)と心理学的方法論とのゴチャ煮に終った。これは，定年退職という公私二面の意味を含む歴史的な機会に――悠久な時空形式の移ろいの裡に；全く偶然というべきチャンスに；私という生きものが；北大教育学部会議室という場所で；私が 63 歳を明日迎えようという時点で；私と何らかの係わりをもった人達を対象として；個として，すなわち私即公の一単子（monad――しかし，私は有窓と考える）として，行なった最終講義に由来するからである。講義は，公開の形式ではあったが，学外といっても学部出身者が多く，何となく身内同志の気易さで，茶話的に行なったのであった。だから紀要の形で，記念にしてやろうとの教授会の御好意も，親戚筋や隣り近所に記念の手拭いでも配るぐらいの気持で，無雑作に御受けして，有難く思っていたのである。ただ，挨拶廻りに，不精髯のまま膝のとび出たズボンとノータイの室内衣姿では，すこしきまりがわるい，まあせめて洗濯した襯衣をつけ，いささか流行外れの年代ものにせよ，三つ揃の背広を着用に及んで，引越挨拶の口上をひとわたり開陳すれば，万事OKとばかりに泰然としていたのである。というのも，昭和8年(1933)に，岩波教育講座の一分冊として，‘精

神治療学’ Psychotherapeutics と銘打った稚気満々のものをまとめる以前から今日まで，約 40 年にわたる臨床心理の経験を通じて，進化論的見地から‘人’をみ，この立場で診断にも治療にも当ってきたが，その間それ程大した支障や矛盾にぶつからなかったようなので，茶の間的講義の内容であった私の常識に多少のお飾りをつければ，結構引越し記念の手拭いの代りになるだろうと思い込んでいたからである。

この私の常識の内容は，略々次のようにいえるであろう。

(i) ヒトは，Homo sapiens として生物であり，現実には個々としての生命態である。各個人も，生物学的心制と体制との統一態として，各個の生活をいとなんでいる。個々の人の世界は，動物の環界 Umwelt (Uexküll) と同様，各ヒトの Umwelt である。

(ii) 動物も（環界の？）刺戟を選択的に弁別し，受容し，これに応じて反応し（S-R 方式！）ながら，自からの Umwelt を定立しつつこれとの交渉裡に自からの生をいとなむ。この生のいとなみを，‘はたらき’としてみれば‘心制’であり，このはたらきを支持し基づけるのが‘体制’としての構造である。はたらきは，体制的構造間の函数関係を通じてのみ科学的に認識される。他のやり方（内省法）は，それだけでは，問題発見，提起のみに終る。

(iii) ヒトの生命態も同様である。ただ，より進化した態様の心制と体制とがみられる。ヒトの心制を特徴づけるのは，自我意識性と社会性意識とである。ヒトにまで進化し来って，はじめて心制に生命の自覚性がはっきりと現われたのである。意識の発生は，生命態をして，自発的，創造的ならしめる性質を顕著ならしめる。意識性は，生命自体の自己操作を自発的，自己産出的ならしめる可能性とも称すべきもので，生命の進化がヒトの段階に達して，かかる可能性が，はじめて明白に生じ（だから implicit に，latent に，動物にも，ヒトの意識の原始的状態は存する〔Psychoid (E. Bleuler)〕。既述のキャノンの動物実験や近時心理学で動物につき行動研究を行なうのは，この見解承認という前提の上に立つといえよう)，同じく進化の態様として生じた個体（‘生理的早産’（ポルトマン)，その他）と社会（群居性）との関係が，ヒトにおいては，動物と次元を異にすると称し得る特異な態様関係として進化的に顕現し，これに相い応じて，‘ことば’の使用が生じ，ヒトをして象徴を操る生物 (Cassierer)，創意工夫し，自からに自からの問題を課し，環境設定を自からの手で積極的に開拓するにいたらしめたのである。個が，自我であり，自我に社会性が本質的に化合しており，かくてヒトをして価値的存在たらしめるのである。生命の流動 Werden 裡に，原初分割 ur-teilen，根源の根源としての課題解決性への指向 Intendieren などが行なわれることを，認識成立の出発点，ヒトの心制の特徴たる意識性の基本として，廻らぬ舌で描出したが，どこまで成功したか怪しい。ただ，はたらき（心制）が，形体的構造化（体制）と表裏一体となり，単なる時間系列での持続 (Bergson) ではだめで，体制化されて（ヒトの‘ことば’として；文章として；彫刻，作曲としてなど)，つまり時間が空間において具体化して，はじめて，生命態の進行（科学の精緻化による感覚界の拡大（素粒子論の如き極微世界の開拓)；行為の世界における自己完成；歴史的進行における革新，進歩等。）も，すなわち価値の具体的増進も，可能なることを，指摘したまでである。かくてヒトの意識は，私，公二面の化合的彩りをもつのである。われわれの認識に，知的ないとなみに，‘人のちえ’に，進歩があるならば，それは生命態の自己展回である。今日のホモ・サピエンスは，原水爆をもて余しているようだが，やがて‘人のちえ’は，これを調和的に包括できるようになろうと私は楽観している。でなければ，ヒトは，人間になれないまま，元の杢阿弥から出直しだ。生命は，それほど愚かではあるまい。

(iv) ヒトの心制に対応する体制は，大脳の発達と直立歩行，手腕の自由度拡大（道具使用）などに伴なう身体的構造の特徴的変化として明らかに認められる。そうして，各水準ごとに，ホメオスタシスをそれぞれ示している。形体は自からを保持しようとする一定範囲の恒常性をもつ。

(v) ヒトは，日常，‘人’として，自我性意識と社会性意識とに特徴づけられる心制と自己の体制とが相呼応しつつ，いわゆる社会的動物として行動し，社会生活裡に具体的生をいとなむ。‘ことば’を中心とする表現行動が，社会的存在としての自我的個人の主要なる環界操作の道具である。臨床心理の主対象たるいわゆる適応障害は，かかる日常生活裡における何らかの悩み，支障，欠乏，困難，異常の態様なのである。

(vi) 通常の意味での適応障害は，日常人としての‘人’Man——Heidegger の Uneigentliche Existenz——にかかわり，実存主義的に難しく考えないでも，平常人のレベルでの支障，障害を何とか軽減または除去することを目標として，診断治療を行なえば，それでこと足りる。この際，操作に利用できるのは，ゲシュタルト要因たる部節の機構である。ヒトの進化的秩序に関する知見が，ものをいう所以である。‘人’が‘人間’として悩む価値関係を無視するわけではないが，その方は，専門的には，社会科学の蘊奥を極めた教育学者にお任せして，こちら

は，一段レベルの低い無自覚的日常人のレベルで，情意もヒト的構造にはたらきかけて操作し，いわば‘人’としてのメカニズムの故障を修理（?）して，正常となったあとは，御本人の決断，運命に任せようというのである。そうでないと，忙しくてたまらない。手がそこまで，いな‘ちえ’が，そこまで廻りかねるという Man 的立場である。ヤスペルスを引用した時に，僭越を顧みず，彼の精神病理学方法論は，第3版でほぼ完了。第5版，第7版は，私のようなものには，すこし高尚すぎ，人間臭味が強すぎると申し上げた所以である。臨床心理学において，‘人’の心制操作には，ヒトの心制，体制についての進化論的——したがって，生物学的——見地での知見，科学的認識の多面的使用，これらを駆使した‘限界’において‘人’の‘ちえ’で総合（‘人間’水準での超越，飛躍に当るが，進化的（?）に一段低い水準のはたらき?）すれば，こと足りることを，Man として40年間にわたり，自分の主な仕事として過してきた臨床経験から，大胆かも知れないが，断言したのである。ただ，‘ちえ’は，生物学的（したがって，心理学的）認識をできるだけ極めておかなくては，科学的総合——臨床心理‘学’的診断治療——とはいいえない。平生の勉強，研究が大切だし，臨床的‘勘’の練磨を忘れずにと，親愛なる卒業生諸君への贔屓として，implicit に申したつもりなので，いわずもがなのすこし気恥しいほどの常識論なのである。

以上，vi までを，私の常識として，転居退出の挨拶として申上げれば，こと足りると思っていたら，私自身が，教育学部教授の位置にあったことを改めて発見‘自覚’して，すこし慌てはじめた。私のヒト（人）としてのホメオスタシスが，動揺したのである。この動揺，この欲動は，はしなくも私の教室の‘人間’である狩野の10年前の論文‘心理学的世界’を記憶の底から甦らせるにいたらしめた。このエッセイでは，人間が，価値的体系そのものであり，この価値的ヴエクターを強化し，しかもその具体化に当って選択を支持し指示目標を各方面にわたって与えるべき社会科学的認識の必要性と，かかる社会的行為者としての人間が，生物学的存在として誕生しながら，長年月にわたる時間（私は，時間は価値の流れともいえると思うが）的経過の裡に，社会環境との接点的対応，交渉を通じて自己の心理学的世界を形成して行き，自からの価値的力動系をつくり上げて行く様子が，鮮かに描かれている。

回顧すると，私は，人間としての狩野を，私の教室に招じ入れたことにより，教育学部教授を，自から罷免して，したがって堅苦るしい人間の座を下り，顚落した人界に安住し，自ら‘人’としての臨床心理学的実践（体裁よくいえば，University-extension）へ，乏しいちえをしぼっていたらしい。人間教育は，狩野に委譲したと独りぎめしていたのである。すこし虫がよすぎたようだ。お恥しい次第である。

“精神”は，価値的存在としての個的人間の心制である。ここでも，私の進化論は通用する。通用はするが，通用するだけでは，生産的ではない。社会学的術語を，生物学的言語に飜訳しても，何の生産性も増さないことは，Driesch が，目的原理をエンテレヒー Entelechie と命名して，新生気論を唱えても，そのために生物学や社会等に貢献し得ないと同様である。“経験”の意味を正しく把握し，自然科学的認識の確立（第一批判）を達成し，第2批判，第3批判を通じて，合目的的性を原理として，善と美の世界を体系づけ，これと共に，自然認識をも合目的的原理の下に統一して，人間中心の大宇宙界を，私たちの Umwelt として，具象化してくれた Kant の偉業に——そうして，生意気にも，Kant をすこし嚙って哲学はもう分った（Ur-geteilt?）と盲断した40年前の私自身に——驚嘆と自責の念との浮ぶを禁じ得なかった正直な告白が，精神についての私の自覚的回顧である。

教育学者は，社会科学的認識の限界を，多方面から明らかにする任務をもつ。適応障害ならざる人，または児童は，それ自身正常で自発的な価値具現者として，人間の明日の歴史を荷う行為者だからである。行為は決断であり，決断，飛躍は科学的認識の限界において個たる人間により行なわれるべきである。臨床心理学において必要なのは，‘人’を操作するための道具的知見——ヒトの生物学——であった。教育等においては，人間の明日への歩みを，なるべく効果的に，換言すれば，より合理的に，人間にふさわしい生の展回として，より価値生産的に進めるための科学が——これが，社会科学，歴史学等の領域であろう——必要とされる。社会科学は，生物学よりよほど高級，複雑らしい。ここでは，専門家は，常識では済まされない。常識で済ましていれば，私と同様失格である。私は，お詫びしつつすぐ退散する立場であるが，残っている同僚諸兄に私の真似はさせたくない。‘人’の世界に顚落 verfallen しても，私は臨床家として稼げるが，諸兄には，どのような技術が残るだろうか。これは，すこし余計な心配というものであろう。しかし，ヤスペルスが，実存主義者として，Heidegger の存在学を批評したことは，肯綮に値する。科学は，個人の行為を具体的に，形体化された体制として示すべきではない。それは，僭越である。人の行為は，個としての人間の自由なる決断，飛躍，超越に任かすべきであろう。科学は，認識の提供者で，実存開明の道具を精密化し，多様に準

備する任務をもつ。臨床心理の実践において，‘自信をもて’，‘安定せよ’，‘妻を愛せよ’，‘盗むな’と号令をかけるのは全く意味がないのみならず，森田正馬の注意の交互作用説の示す通り，悪影響を与えかねない。人間でも，心制を操作するには——価値具体化へ決断させるには，正確なる社会科学的認識の限界を各方面から提示することが必要なのである。しかも，それで充分であり，その限界の総合において，各自の個的決断が示されるのである。ヤスペルスの精神病理学総論（第5版以後）が示すように，多方面よりの認識が，‘人間’への自覚，実存開明には必要なのである。ヤスペルスぐらいになると，臨床心理学者も，個たる‘人間’（ヒトではない）対手に診断治療ができ，実存分析とか，Logo-therapie など，高級な言語療法を派生するにいたらしめる。Manとしての私は，愕然として襟を正し，なに，それは昔から得意のムン・テラ（Mund-therapie というドイツ語はないらしい）さ，とへらず口を叩くのも忘れて過ぎにし年月を回顧しつつ，絶対無の自己限定，同じく人間になるならば，東洋的覚悟こそ望ましいと，退官を好機として‘魂’の錆落しにとりかかっているところである。Mundus vult decipi.（これは，ムン・テラからの連想にすぎない）。しかし，世間をごま化すことはできても自分自からを欺くことはできない。ヒトの心制の裡に，体制の裡に，カントの合目的的原理は，進化の結果として顕現し，ヒトのホメオスタシスの擾乱収拾を規制しているからである。ヒトは個として生をいとなみ，個として価値世界に参与している。生命の進化の裡には，良心も化学的に精練されつつ脈打っているのである。知は，理は，個の生のいとなみに具体的目標，具体的進路を指示選択せしむる。目標は，それ自体生命の展回により ur-teilen されてくるから，物質から精神まで，あらゆる科学的認識の結実，あらゆる創作活動の結実，あらゆる社会活動の結実として，ほとんど数え切れない時空形式の脈絡裡の結節として，私たちに提供される。万般の文化的所産，科学的知見，芸術，技術，生産物等々がそれである。**これらの価値は，自我意識の個的統一裡に生じ，個は，この価値を，何らかの行働（体制運動，行動）を通じて表出する。**表出の意味は，第三者により意味づけられ，表現として価値となる。**かくて個の表出は，社会的価値となる。**社会的価値の優なるものに，それぞれ産出者の固有名詞が，附加されるのは当然なのである（漱石の‘草枕’，ゲーテのファウスト，ロダン，マルクス，ケインズ，カント，西田幾太郎，吉野源三郎，石橋はや（松沢病院看護），林田栄（北大幼児園）etc.）私も，どれだけ価値があるか分らないが，奥田千春，信子という親により，ことに母の胎内を経て創出され，社会人として（ことに私は国税で養われてきた国家公務員であった）形成され，生活してきたことは誤りない。あとからみれば，進化の一齣として必然であり，しかも前途は冒険の毎日なのである。

地球は狭くなったというが，33億の人の生活の場である。33億中，私と直接的かかわり合いを持った人は，おそらく10万人になるまい。北大教育学部の縁で結ばれ，いわゆる‘出遭った’人は，さらにこの一割にも達しまい。私の教室出身者は，この一割のまた1%弱であろう。‘人’を中心として，私は‘ヒト’の方の認識を主にして今日までやって来た。この小論は，はしなくも，私の‘人間’不足を暴露した。しかし，今回の反省を契機として，因縁深き方々と‘人間的交通’をもっと深め大切にしたい。もう，ヒトでも，人でも，人間でも，区別の要はない。生命の進展，展回の合目的的であることを，私の臨床経験は深く教える。自我意識は社会性意識と十全に合体調和して，はじめてプシュケの美となろう。お互いに自愛したい。自重したい。自愛は他愛と相即不可分であり，自重は，他の尊重と表裏一体である。進化論の教える生命のあり方は，私にはまさに尊厳そのものである。価値は，個としての私たちひとり，ひとりを通じて，具体化され，社会の公有物となるのである。臨床家は，せめて地の塩として役立ちたい。（1967. Feb. 27）

附記：遅筆のため，編輯委員各位，事務担当の方々に多大な御迷惑をおかけした。深く御詫びする。